

金剛坂遺跡(第5次)・辰ノ口古墳群(第3次)発掘調査報告

2001年3月

三重県埋蔵文化財センター

序

このたび、一般地方道多気停車場斎明線の整備工事に伴って消滅していく金剛坂遺跡と辰ノ口古墳群の一部を発掘調査いたしました。

当遺跡の存在する明和町は、国史跡斎宮跡をはじめとする歴史的遺産が数多く存在しており、県内の歴史を究明するうえで重要な地域となっております。

今回の調査の結果を概観いたしますと、金剛坂遺跡からは、弥生時代前期に遡る円形周溝墓・方形周溝墓が発見されました。また、辰ノ口古墳群からは古墳時代後期の古墳の周溝が見つかりました。このように当地域の歴史を追究するうえからも貴重な資料を得ることができました。消滅した遺跡に代わり、発掘調査の成果が郷土の歴史ひいては文化を伝え、活用されていくことを切望いたします。

なお、文末ながら、協議から発掘調査にかけて多大のご理解とご協力をいただいた県土整備部ならびに松阪地方県民局建設部、明和町教育委員会をはじめ、発掘調査にご助力をいただいた地元の方々に心より感謝申し上げます。

平成13年3月

三重県埋蔵文化財センター

所長 藤澤英三

例 言

1. 本書は、三重県多気郡明和町金剛坂字坂垣内・辰ノ口・古垣内・森田に所在する金剛坂（こんごうさか）遺跡の第5次調査および明和町金剛坂字辰ノ口に所在する辰ノ口（たつのくち）古墳群の第3次調査の発掘調査結果をまとめたものである。

2. 調査は、下記の体制で行った。

調 査 主 体	三重県教育委員会
調 査 担 当	三重県埋蔵文化財センター 調査第一課 主 事 奥 野 実 資料普及グループ研修員 打田 久美子
調 査 期 間	平成11年11月8日～平成11年12月28日
調 査 面 積	350m ²

3. 本書の執筆・編集・遺物写真は、奥野が担当した。

4. 写真図版の遺物番号は、出土遺物の実測図の番号と対応させてある。

5. 本書で用いた遺構表示略記号は、下記のとおりである。

SD：溝 SK：土坑 SX：円形周溝墓・方形周溝墓

6. 本書で示す方位は、国土座標第VI系を基準とする座標北を用いた。なお、磁北は約6°30′西偏（平成9年、国土地理院）している。

7. 本書で報告した記録および出土遺物は、三重県埋蔵文化財センターで保管している。

8. 調査にあたっては、地元在住の各位、三重県県土整備部道路整備課、松阪地方県民局建設部、明和町教育委員会にご協力をいただいた。

9. スキャニングによるデータ取り込みのため若干のひずみが生じています。各図の縮尺率は、スケールバーを参照ください。

本文目次

I 前言	1
II 位置と歴史的環境	2
III 基本層序と遺構	9
IV 遺物	12
V 結語	20

挿図目次

第1図 遺跡位置図	5
第2図 遺跡地形図	6
第3図 調査区位置図	6
第4図 調査区平面図	7
第5図 調査区土層断面図	8
第6図 SX1・SX3・SX6・SX7実測図及び断面図	9
第7図 14号墳実測図及び断面図	10
第8図 出土遺物実測図1	13
第9図 出土遺物実測図2	14
第10図 出土遺物実測図3	15
第11図 円形周溝墓類例	20

表目次

第1表 遺構一覧表	7
第2表 出土遺物観察表1	17
第3表 出土遺物観察表2	18
第4表 出土遺物観察表3	19

図版目次

図版1 調査前風景・A地区全景	23
図版2 B地区全景・SX1	24
図版3 SX3・14号墳	25
図版4 出土遺物	26

I 前 言

金剛坂遺跡は、三重県多気郡明和町金剛坂字辰ノ口・坂垣内・古垣内・森田の広範囲に所在し、明和町遺跡番号36の周知の遺跡である。西方には祓川が流れ、現況は、宅地・墓地・水田・畑地などになっている。

辰ノ口古墳群は、多気郡明和町金剛坂字辰ノ口に所在し、明和町遺跡番号143・507～513の周知の古墳群である。現況は山林・畑地などになっている。これらの遺跡は、過去に県営ほ場整備事業や道路整備工事などに伴い発掘調査が実施されている。

今回の発掘調査は、平成11年度一般地方道多気停車場斎明線緊急地方道路整備工事に伴い実施された。調査に先立ち平成9年10月に試掘調査を実施した。その結果、事業予定地の約350㎡について遺跡が存在する事が確認された。これを受けて、遺跡保存に向けて県土整備部と文化財保護の協議を重ねた。その結果、事業に伴い保存不可能な部分について調査を実施し、記録保存することとなった。

現地調査にあたっては、地元地区在住の方々に補助をしていただいた。記して感謝します。
市野精也、大西み志、小倉亀三郎、櫛谷みよ子
阪井志づ、鈴木律子、永田信夫、長谷川久江
脇坂栄子

(1) 調査日誌抄

1999年

- 11月8日 松阪地方県民局建設部と現地協議。
- 11月26日 重機による表土掘削開始。
- 11月29日 B地区設定。
- 12月1日 表土掘削終了。
- 12月3日 A地区設定。レベル移動。道具搬入。
- 12月6日 B地区の検出、掘削開始。
- 12月8日 B地区清掃、写真撮影。A地区の検出、掘削開始。

- 12月9日 SX3・SX6などの掘削。
- 12月10日 B地区遺構平面図作成。
- 12月13日 B地区土層断面図作成。
- 12月16日 A地区清掃、写真撮影。道具搬出。
- 12月17日 A地区遺構平面図作成。
- 12月20日 A地区土層断面図作成。
- 12月28日 清掃後、スカイマスターにて調査区の写真撮影。松阪地方県民局建設部へ引き渡し。

(2) 調査の方法

調査区は、2地区に分かれており、西方をA地区(字辰ノ口)、東方をB地区(字古垣内)とした。そして、調査区を4m四方の升目で区切り小地区を設定した。西から東へ1～24、北から南へA～Cを配置した。なお、この地区設定は、国土座標とは無関係である。

掘削方法については、表土は重機で、包含層以下・遺構までを人力で行った。

また、調査区全体の平面図及び各土層断面図は、縮尺1/20で作成した。

(3) 文化財保護法に関する諸通知

文化財保護法(以下、法)等にかかる諸通知は以下により文化庁長官宛に行っている。

- ・法第57条の3第1項(文化庁長官宛)
平成11年8月3日付道建第682号(県知事通知)
- ・法第98条の2第1項(文化庁長官宛)
平成11年11月11日付教生第1131号(県知事通知)
- ・遺失物法にかかわる文化財発見・認定通知(松阪警察署長宛)
平成12年2月2日付教生第4-52号(県教育長通知)

Ⅱ 位置と歴史的環境

1 遺跡の位置

金剛坂遺跡(1)・辰ノ口古墳群(2)は、三重県多気郡明和町金剛坂に所在する。現在の行政区画の明和町の西端部にあり、西部は松阪市に隣接している。

当遺跡は、明和町の西部を流れる祓川右岸の洪積台地上に立地する。この祓川は、かつて櫛田川の本流であったと考えられ、永保2年(1082)の地震と洪水によって現在の櫛田川が本流になったと伝えられている^①。また、当遺跡の南方には玉城丘陵と呼ばれる標高110mから130m程度の低丘陵が存在している。

今回の調査区は、標高約15mの台地上に位置し、現況は雑種地となっている。周辺には宅地が広がり、南方には、県道鳥羽・松阪線が通じている。

2 歴史的環境

(1) 当遺跡の歴史的環境

当遺跡の所在地である多気郡明和町金剛坂は、古代において多気郷に属しており^②、北方には斎宮が存在した。中世には関所があり、北畠氏が関銭徴収権を持っていた^③。近世に入って和歌山藩田丸領に属した。北方には伊勢街道が通じていた^④。

A 当遺跡の調査成果

金剛坂遺跡は県内でも著名な遺跡と知られ、多くの先学による研究がある^⑤。また、過去には場整備事業に伴う事前調査などが実施されて、貴重な成果が得られている。

昭和46年の第1次調査では、弥生時代中期の方形周溝墓や飛鳥時代の竪穴住居などが見つかかり、縄文時代後期とされる環状壺や弥生時代前期の遠賀川式土器などが出土している^⑥。昭和59年の第2次調査は、森田地区・辰ノ口地区で調査が行われた。森田地区では、弥生時代後期の方形周溝墓や奈良時代の土坑などが確認された。辰ノ口地区では、弥生時代前期の土坑や溝、奈良時代の竪穴住居・掘立柱建物・土師器焼成坑などが見つかっている^⑦。平成5年の第3次調査は、明和町教育委員会によって実施され、弥生時代の方形周溝墓の周溝の一部などが確認されて

いる^⑧。平成10年の第4次調査では、弥生時代前期の竪穴住居や土坑などが見つかった^⑨。

上記の調査成果を踏まえて、川崎志乃氏は、弥生時代の集落が時期ごとに場所を変えて移動している可能性を指摘している^⑩。

辰ノ口古墳群については、昭和59年の調査を第1次調査、平成10年の調査を第2次調査と称している。1・2号墳は現存している。発掘調査によって、周溝のみであるが10基確認されている。その内9基は方墳と考えられている。

また、辰ノ口地区からは瓦が出土し、辰ノ口廃寺として報告されている^⑪。

(2) 当遺跡周辺の歴史的環境

ここでは、今回の調査に関連する縄文時代～古墳時代の遺跡について概述する。

A 縄文時代

早期では、コドノB遺跡(3)から集石炉などが検出され^⑫、上村池A遺跡(4)でも神子柴型石斧や早期の土器などが表採されている^⑬。

前期～後期の遺跡は、玉城丘陵上やその周辺で多く確認されている。丸山B遺跡(5)では前期の土器が、六ツ葉広遺跡(6)・上村池B遺跡(7)からは中期と後期の土器が表採されている。また、斎宮池遺跡(8)からも、磨石や中期末から後期初頭の土器などが出土している^⑭。

晩期になると確認される遺跡数は増えてくる。西出遺跡(9)では人面土版と土器^⑮が、栗垣内遺跡(10)・コドノA遺跡(11)^⑯・河田古墳群(12)C支群^⑰からも土器が出土した。また、玉城丘陵の南方の森荘川浦遺跡(13)からは、赤色顔料の付着した磨石や後期と晩期の土器などが出土し、朱の生産遺跡と考えられている^⑱。

当遺跡においても後期と晩期の土器が出土している。

B 弥生時代

当遺跡周辺には、多くの前期の遺跡が存在する。遺構が検出されている遺跡は、栗垣外遺跡(14)^⑲・コドノB遺跡・大道A遺跡(15)である^⑳。この中では、

コドノB遺跡から見つかった方形周溝墓が注目される。また、馬渡遺跡(16)^②・斎宮跡〔古里遺跡〕(17)^③・神前山1号墳(18)^④・河田古墳群A支群^⑤・上村ウシバ遺跡(19)・曾祢崎遺跡(20)^⑥などでも、遠賀川式や亜流遠賀川式土器の壺や甕などが確認されている。

当遺跡周辺で見ついている中期の遺跡は、馬渡遺跡・西出遺跡・斎宮跡〔古里遺跡〕・寺垣内遺跡(21)^⑦・コドノB遺跡・西村遺跡(22)^⑧などがある。前期の遺跡と比較すると、遺跡数は減少している。代表的な遺跡としては、斎宮跡〔古里遺跡〕・寺垣内遺跡があげられる。斎宮跡〔古里遺跡〕では、中期から後期の竪穴住居や方形周溝墓などの数多くの遺構が見ついている。また、寺垣内遺跡からは、中期から古墳時代前期の方形周溝墓をはじめ、竪穴住居など多数の遺構が検出されている。

後期になると当遺跡周辺でも、大規模な集落の存在が確認されている。主な遺跡をあげてみると、北野遺跡(23)からは、竪穴住居100棟以上が検出され、銅鐸形土製品が出土している^⑨。コドノB遺跡では、後期の竪穴住居や末期から古墳時代初めの方形周溝墓などがみついている。また、櫛田川左岸の堀町遺跡(24)からは環濠がみつかり、銅鐸形土製品が出土している^⑩。

当遺跡南方約5kmの外城田川流域においても、弥生時代の遺跡が多く存在している。上ノ山遺跡(25)からは、前期新段階の竪穴住居が見ついている^⑪。また、波瀬B遺跡(26)^⑫と上ノ山遺跡では、中期の方形周溝墓が検出されている。仲垣内遺跡(27)^⑬や月よべ遺跡(28)^⑭・赤垣内遺跡(29)^⑮からは、後期の竪穴住居や方形周溝墓などがみついている。これらの3遺跡は一体の遺跡と考えられている。

C 古墳時代

当遺跡周辺では、古墳時代後期の古墳群が多数確認されており、当地域の特徴とすることができる。

明野原台地の縁辺部に位置する代表的な古墳群としては、塚山古墳群(30)^⑯と坂本古墳群(31)がある。この中の坂本1号墳からは金銅装頭椎大刀が出土し、7世紀後半の前方後円墳であることが確認された^⑰。また、当遺跡に近接して、織糸古墳群(32)が存在していた。

玉城丘陵上にも数多くの古墳が分布している。代

表的なものとしては、神前山古墳群や大塚古墳群(33)・河田古墳群・権現山古墳群(34)・高塚古墳群(35)・上村池古墳群(36)・斎宮池古墳群(37)などがあげられる。

この内、神前山1号墳は5世紀後半に築造された帆立貝式前方後円墳で、画文帯神獸鏡3面が出土した。また、大塚1号墳は、5世紀後半から6世紀前半に造られた帆立貝式前方後円墳である。河田古墳群は100基以上からなり、10の支群に分けられている^⑱。権現山2号墳からは滑石製埴や円筒埴輪が出土し、5世紀前半に造られたと考えられる。同古墳は、今のところ玉城丘陵上に分布する最古のものである^⑲。高塚1号墳は、全長75mを測る帆立貝式前方後円墳で、玉城丘陵上に分布する最大のものである。上村池古墳群では、横穴式石室の古墳が20基確認されている。

明野原台地中央部分には、12基からなる明星古墳群(38)と2基からなる曾祢崎古墳群がある^⑳。この中の、明星7号墳は7世紀初頭に造られた前方後円墳である。

一方、集落跡などは古墳群と比べるとあまり確認されていない。しかし、多様な遺構が確認されており、たいへん興味深いものがある。

以下、各時期の代表的な遺跡をあげてみる。

前期の遺跡は、櫛田川流域で多く確認されている。古轡通りB遺跡(39)からは、前期の四面庇の掘立柱建物とセットになるくり抜き井戸が見ついている^㉑。瀬干遺跡(40)では、前期前葉の方形周溝墓が検出されている^㉒。琵琶垣内遺跡(41)からは、竪穴住居などがみついている^㉓。また、中の坊遺跡(42)では、中期の大型の竪穴住居や土坑から多数の土師器高杯が出土した^㉔。

後期の遺跡としては、堀田遺跡(43)^㉕や北野遺跡などがあげられる。堀田遺跡からは、後期の竪穴住居などが検出されている。また、北野遺跡では初頭の竪穴住居や方形周溝墓、後期の竪穴住居や古墳・土師器焼成坑などが数多くみついている。

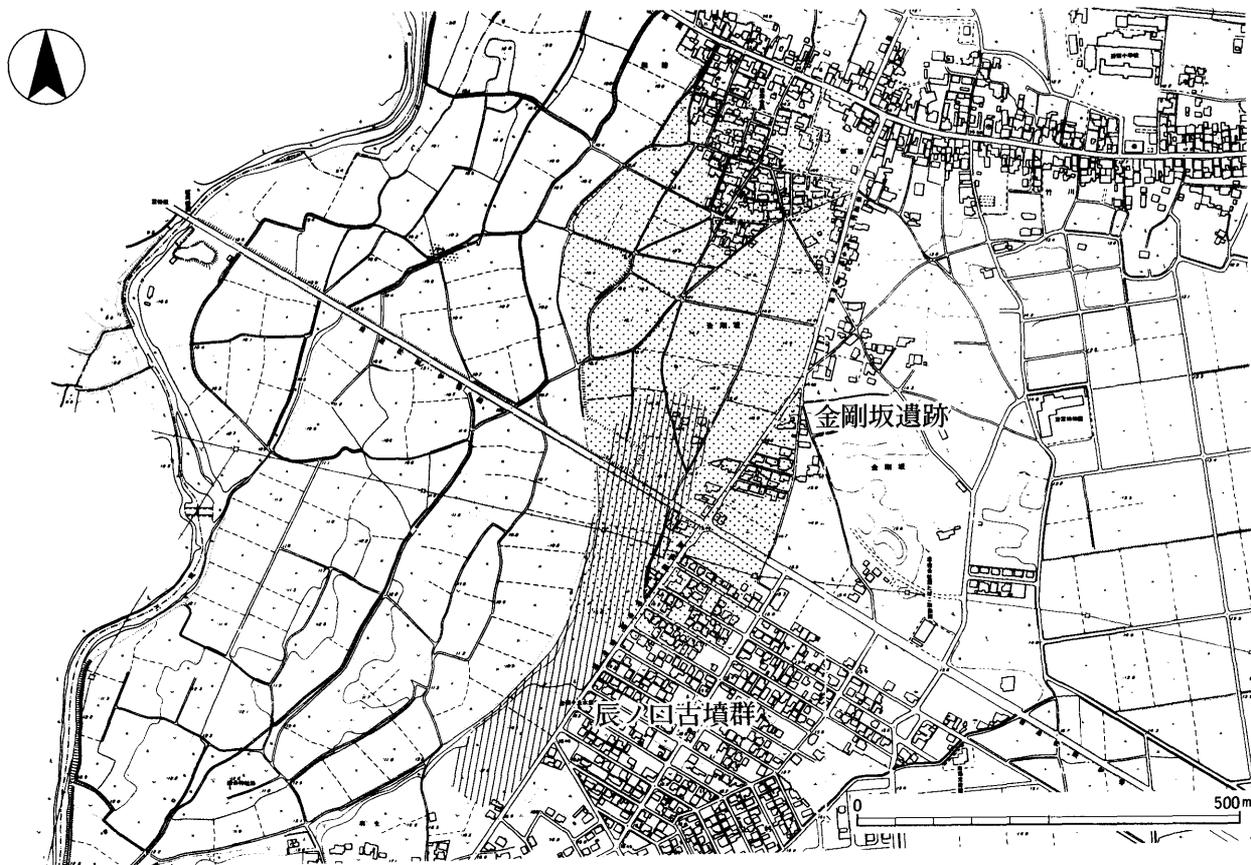
以上のように、当遺跡周辺の歴史的環境について概観してきた。当地域では、縄文時代から連続と続く生活の痕跡が窺われる。

〔註〕

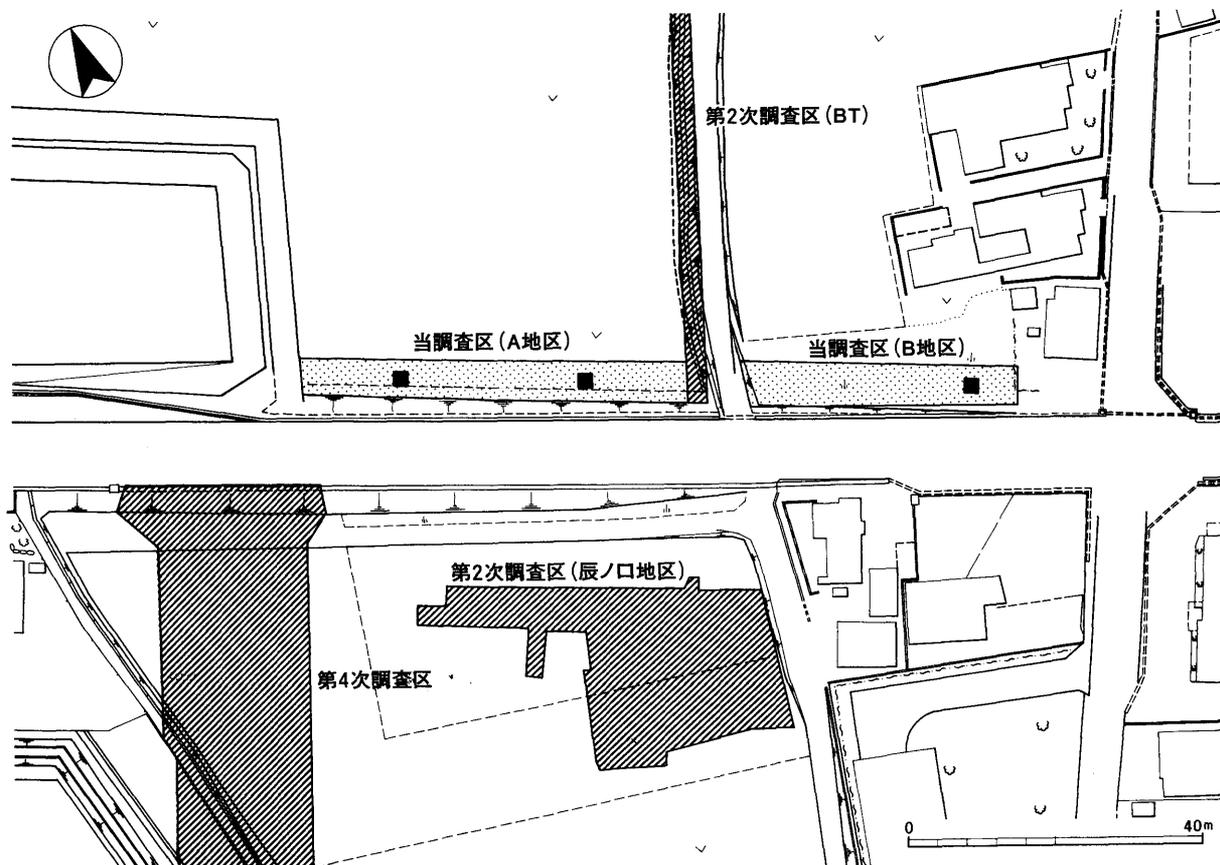
- ① 松阪市史編纂委員会『松阪市史』第1巻史料編自然（1977年）の267頁。
- ② 池辺 彌『和名類聚抄郡郷里驛名考證』（吉川弘文館、1981年）の294頁。
- ③ 小林 秀「街道と関所」（『ふるさとの年輪』、明和町、1998年）。
- ④ 三重県教育委員会『伊勢街道—歴史の道調査報告書』（1986年）の106・107頁。
- ⑤ 研究論文などについては、下記の文献にまとめられている。
中野教夫「町内埋蔵文化財関係文献一覧」（『明和町遺跡地図』、明和町、1988年）。
- ⑥ 山澤義貴・谷本鋭次『金剛坂遺跡発掘調査報告』（明和町教育委員会、1971年）。
- ⑦ 田村陽一・浅尾 悟・宮田勝功「Ⅲ 多気郡明和町金剛坂遺跡」（『昭和59年度農業基盤整備事業地域埋蔵文化財発掘調査報告』、三重県教育委員会、1985年）。
- ⑧ 三重県埋蔵文化財センター『三重県埋蔵文化財センター年報5』（1994年）の65頁。
- ⑨ 萩原義彦・川崎志乃『金剛坂遺跡〔第4次〕・辰ノ口古墳群〔第2次〕発掘調査報告』（三重県埋蔵文化財センター、1999年）。
- ⑩ 川崎志乃「葦川右岸地域の地形と弥生集落の様相」（『みずほ』、大和弥生文化の会、2000年）。
- ⑪ 鈴木敏雄『三重県古瓦図録』（楽人文庫、1933年）の109・110頁。
- ⑫ 以下、コドノB遺跡については、下記の文献による。
西出 孝『コドノB遺跡〔第2次・第3次〕発掘調査報告』（三重県埋蔵文化財センター、2000年）。
- ⑬ 中野教夫編『明和町遺跡地図』（明和町、1988年）。以下、註の付されていない遺跡の概要は、上記の文献による。
- ⑭ 小山憲一「斎宮池遺跡」（『宮川用水第二期地区埋蔵文化財発掘調査概報Ⅰ』、三重県埋蔵文化財センター、2000年）。
- ⑮ 以下、西出遺跡については、下記の文献による。
三重県教育委員会『三重県埋蔵文化財年報9』（1979年）の41頁。
- ⑯ 三重県教育委員会『三重県埋蔵文化財年報10』（1980年）の44頁。
- ⑰ 西出 孝『コドノA遺跡・コドノB遺跡〔第1次〕発掘調査報告』（三重県埋蔵文化財センター、1998年）。
- ⑱ 奥 義次「河田古墳群C支群〔東谷C遺跡〕出土の先土器・縄文時代の遺物」（『河田古墳群発掘調査報告Ⅲ』、多気町教育委員会、1986年）。
- ⑲ 奥 義次「第2編原始」（『多気町史』通史、多気町、1992年）。
- ⑳ 三重県教育委員会『三重県埋蔵文化財年報9』（1979年）の40頁。
- ㉑ 三重県教育委員会『三重県埋蔵文化財年報16』（1986年）の49頁。
- ㉒ 以下、馬渡遺跡については、下記の文献による。
三重県埋蔵文化財センター『三重県埋蔵文化財センター年報4』（1993年）の71頁。
- ㉓ 以下、斎宮跡（古里遺跡）については、下記の文献による。
山澤義貴『古里遺跡発掘調査報告書C地区』（三重県文化財連盟、1973年）。
谷本鋭次『古里遺跡発掘調査報告書D地区』（三重県文化財連盟、1974年）。
- ㉔ 下村登良男『神前山1号墳発掘調査報告』（明和町教育委員会、1973年）。
- ㉕ 吉水康夫「河田古墳群発掘調査報告Ⅰ」（多気町教育委員会、1974年）。
- ㉖ a 西村美幸『曾祢崎遺跡発掘調査報告』（三重県埋蔵文化財センター、1996年）。
b 西村美幸『曾祢崎遺跡〔第2次〕・曾祢崎古墳群』（三重県埋蔵文化財センター、1997年）。
- ㉗ 中野教夫「寺垣内遺跡発掘調査概要」（『第6回三重県埋蔵文化財発掘調査報告会』資料、1985年）。
- ㉘ 高見宣雄「Ⅵ 多気郡明和町西村遺跡・愛場遺跡」（『昭和57年度農業基盤整備事業地域埋蔵文化財発掘調査報告』、三重県教育委員会、1983年）。
- ㉙ 以下、北野遺跡については、下記の文献による。
竹田憲治『北野遺跡〔第5次〕発掘調査概報』（三重県埋蔵文化財センター、1996年）。
- ㉚ 三重県埋蔵文化財センター『一般国道42号松阪・多気バイパス埋蔵文化財調査概報Ⅷ』（1998年）。
- ㉛ 以下、上ノ山遺跡については、下記の文献による。
上村安生『上ノ山遺跡発掘調査報告』（三重県埋蔵文化財センター、1992年）。
中世古憲司『上ノ山遺跡発掘調査報告』（玉城町教育委員会、1995年）。
- ㉜ 上村安生『波瀬B遺跡発掘調査報告』（三重県埋蔵文化財センター、1992年）。
- ㉝ 小玉道明「度会郡玉城町仲垣内遺跡」（『昭和48年度県営圃場整備事業地域埋蔵文化財発掘調査報告』、三重県教育委員会・三重県文化財連盟、1979年）。
- ㉞ 小玉道明「度会郡玉城町月よべ遺跡」（『昭和48年度県営圃場整備事業地域埋蔵文化財発掘調査報告』、三重県教育委員会・三重県文化財連盟、1979年）。
- ㉟ 小玉道明「度会郡玉城町赤垣内遺跡」（『昭和48年度県営圃場整備事業地域埋蔵文化財発掘調査報告』、三重県教育委員会・三重県文化財連盟、1979年）。
- ㊱ 野原宏司「第112次調査」『史跡斎宮跡平成7年度発掘調査報告』（斎宮歴史博物館、1996年）。
- ㊲ 三重県埋蔵文化財センター『三重県埋蔵文化財年報』（1998年）の36頁。
- ㊳ 下村登良男「河田古墳群周辺の古墳分布」（『河田古墳群発掘調査報告Ⅲ』、多気町教育委員会、1986年）。
- ㊴ 註㉓と同じ。
- ㊵ 註㉖のbと同じ。
- ㊶ 奥野 実『古轡通りB遺跡・古轡通り古墳群発掘調査報告』（三重県埋蔵文化財センター、2000年）。
- ㊷ 宇河雅之「瀬干遺跡」（『瀬干遺跡・綾垣内遺跡・柳辻遺跡・大蓮寺遺跡・北ノ垣内遺跡』、三重県埋蔵文化財センター、1996年）。
原田恵理子『瀬干遺跡〔第2次〕発掘調査報告』（三重県埋蔵文化財センター、2000年）。
- ㊸ 野原宏司「閑浄寺遺跡発掘調査現地説明会資料」（三重県教育委員会、1987年）。
- ㊹ 伊藤裕之『中の坊遺跡発掘調査報告』（三重県埋蔵文化財センター、1997年）。
- ㊺ 伊藤久嗣・伊勢野久好「Ⅹ 多気郡明和町堀田遺跡」（『昭和55年度県営圃場整備事業地域埋蔵文化財発掘調査報告』、三重県教育委員会、1981年）。



第1図 遺跡位置図 (1 : 50,000) [国土地理院『松阪』『国東山』『明野』『伊勢』1 : 25,000から]



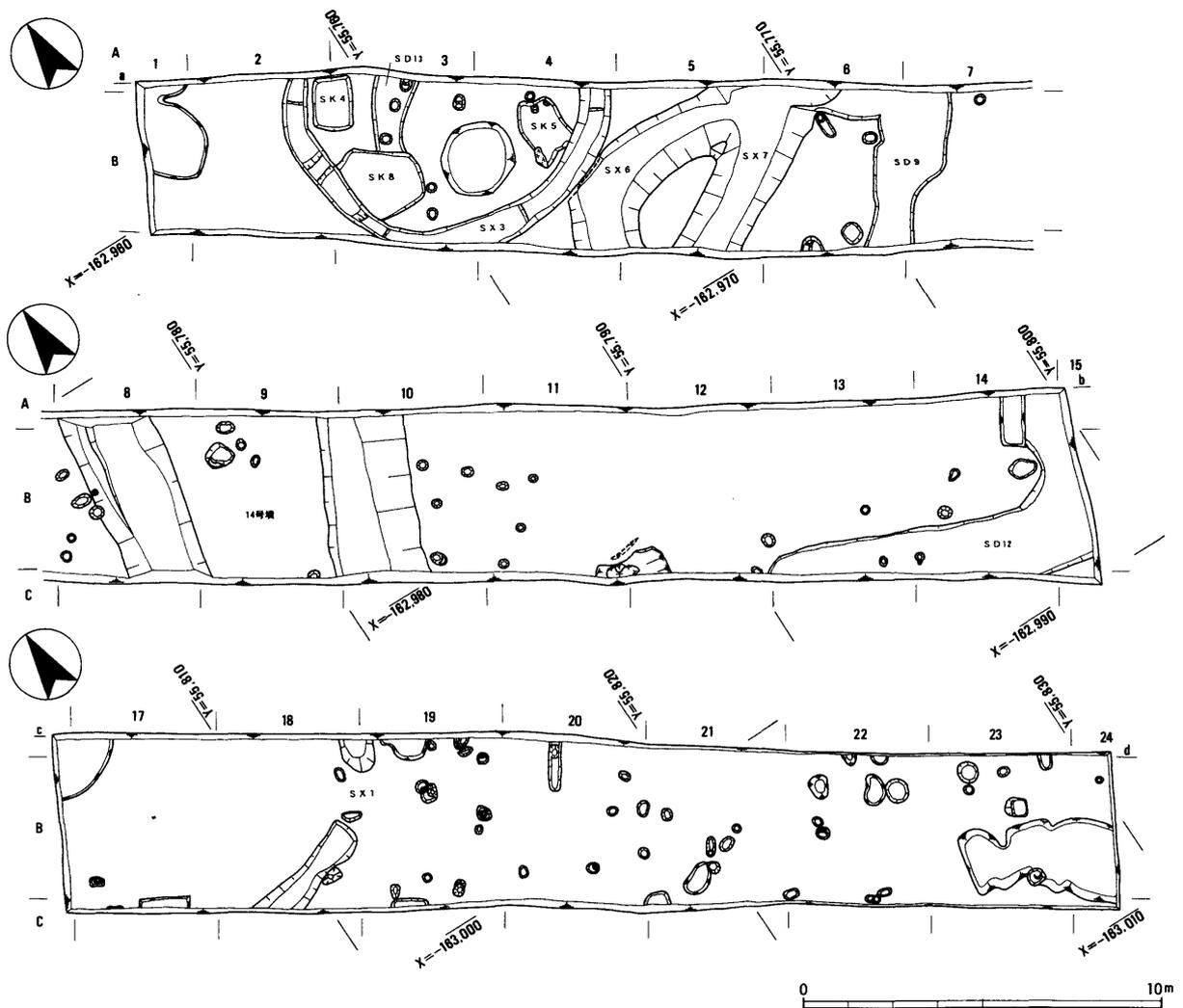
第2図 遺跡地形図 (1 : 10,000)



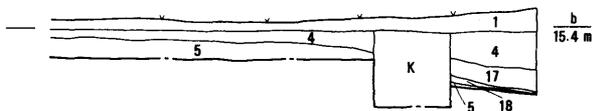
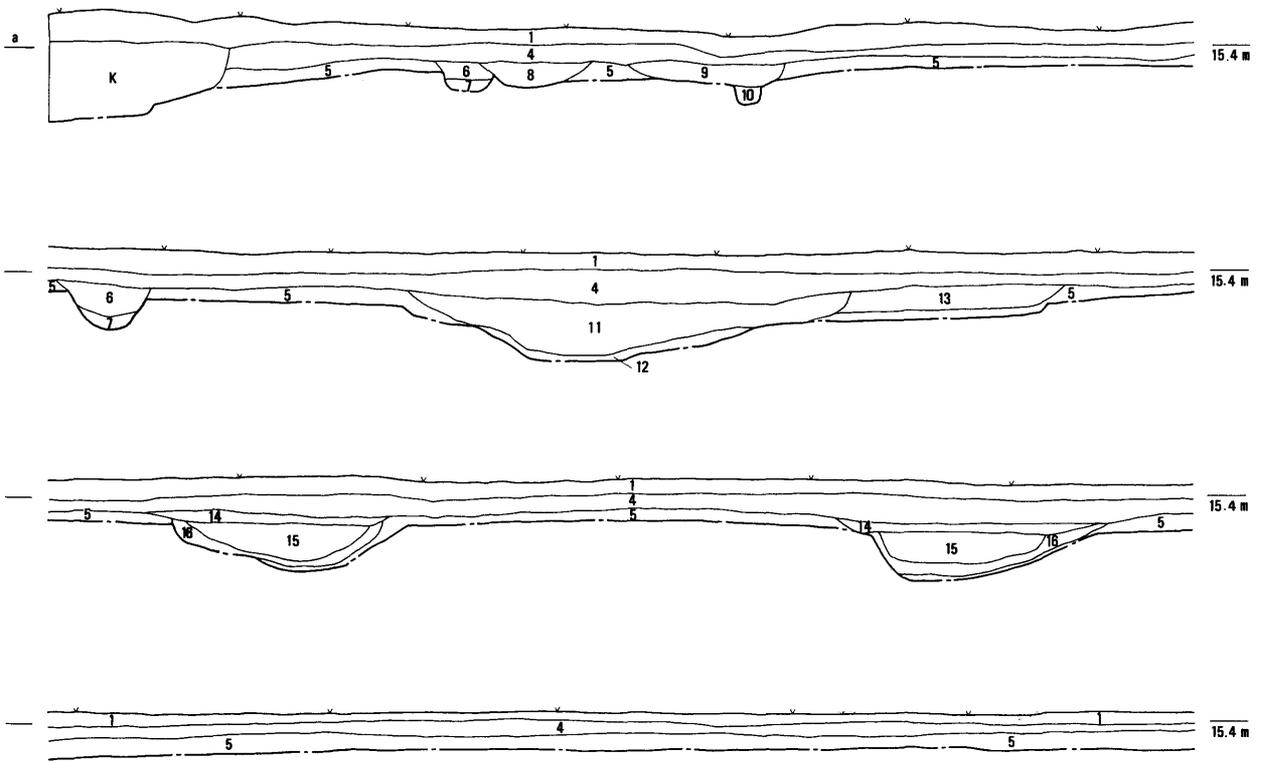
第3図 調査区位置図 (1 : 1,000) [■ 試掘坑]

遺構番号	位置	性格	時期	出土遺物	備考
SX1	A18・19、B18・19	方形周溝墓	弥生	弥生土器片	SD1・2として遺物を取り上げる。
SX3	A2～4、B2～4	円形周溝墓	弥生前期	弥生土器壺・壺蓋・甕・甕蓋	
SK4	A2・3、B2・3	土坑	弥生前期	弥生土器壺・甕	
SK5	B4	土坑	弥生前期	弥生土器壺蓋・甕	
SX6	B4・5	方形周溝墓	弥生前期	弥生土器壺・甕	
SX7	A5・6、B5・6	方形周溝墓	弥生前期	弥生土器壺・壺蓋・甕	
SK8	B3	土坑	弥生前期	弥生土器壺・甕	
SD9	A6・7、B6・7	溝	弥生前期	弥生土器壺・甕	
14号墳	A8～10、B8～10	古墳	古墳後期	土師器高杯・土師器片 須恵器甕・須恵器片	SX10・11として遺物を取り上げる。方墳の可能性あり。
SD12	A14・15、B13～15	溝	古墳後期	土師器片	
SD13	A3・B3	溝	時期不明	なし	

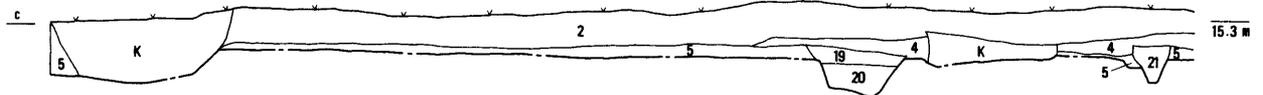
第1表 遺構一覧表



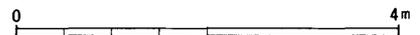
第4図 調査区平面図 (1:200)



1. にぶい黄褐色粘質土〔表土〕
2. にぶい黄褐色粘質土に黄褐色粘質土がまじる〔客土〕
3. 明赤褐色粘質土に黄褐色粘質土がまじる〔客土〕
4. 褐色粘質土に黄褐色粘質土がまじる〔包含層〕
5. 黄褐色粘質土〔地山〕
6. 黒褐色粘質土〔SX3埋土〕
7. 暗褐色粘質土〔SX3埋土〕
8. 灰黄褐色粘質土に黄褐色粘質土がまじる〔SK4埋土〕
9. にぶい黄褐色粘質土〔SD13埋土〕
10. にぶい黄褐色粘質土に黄褐色粘質土がまじる〔pit埋土〕
11. 黒褐色粘質土に黄褐色粘質土がまじる〔SX7埋土〕
12. 灰黄褐色粘質土に黄褐色粘質土がまじる〔SX7埋土〕
13. 褐灰色粘質土〔SD9埋土〕



14. 黒褐色粘質土に黄褐色粘質土がまじる〔14号墳埋土〕
 15. 黒褐色粘質土〔14号墳埋土〕
 16. 灰黄褐色粘質土〔14号墳埋土〕
 17. 黒褐色粘質土〔SD12埋土〕
 18. 黒褐色粘質土に黄褐色粘質土がまじる〔SD12埋土〕
 19. 黒褐色粘質土〔SX1埋土〕
 20. 黒褐色粘質土〔SX1埋土〕
 21. 灰黄褐色粘質土〔pit埋土〕
 22. 褐灰色粘質土〔pit埋土〕
 23. 黒褐色粘質土ににぶい黄褐色粘質土がまじる〔pit埋土〕
 24. 黒色粘質土〔pit埋土〕
- K. 攪乱



第5図 調査区土層断面図 (1:80)

Ⅲ 基本層序と遺構

基本層序は、上より第1層：にぶい黄褐色（10YR 5/4）粘質土〔表土〕、第2層：褐色粘質土（10YR 4/4）に黄褐色（10YR 5/6）粘質土がまじる〔包含層〕、第3層：黄褐色（10YR 5/6）粘質土〔地山〕となる。遺構検出面は第3層上面である。

本調査で確認された遺構は、弥生時代^①と古墳時代

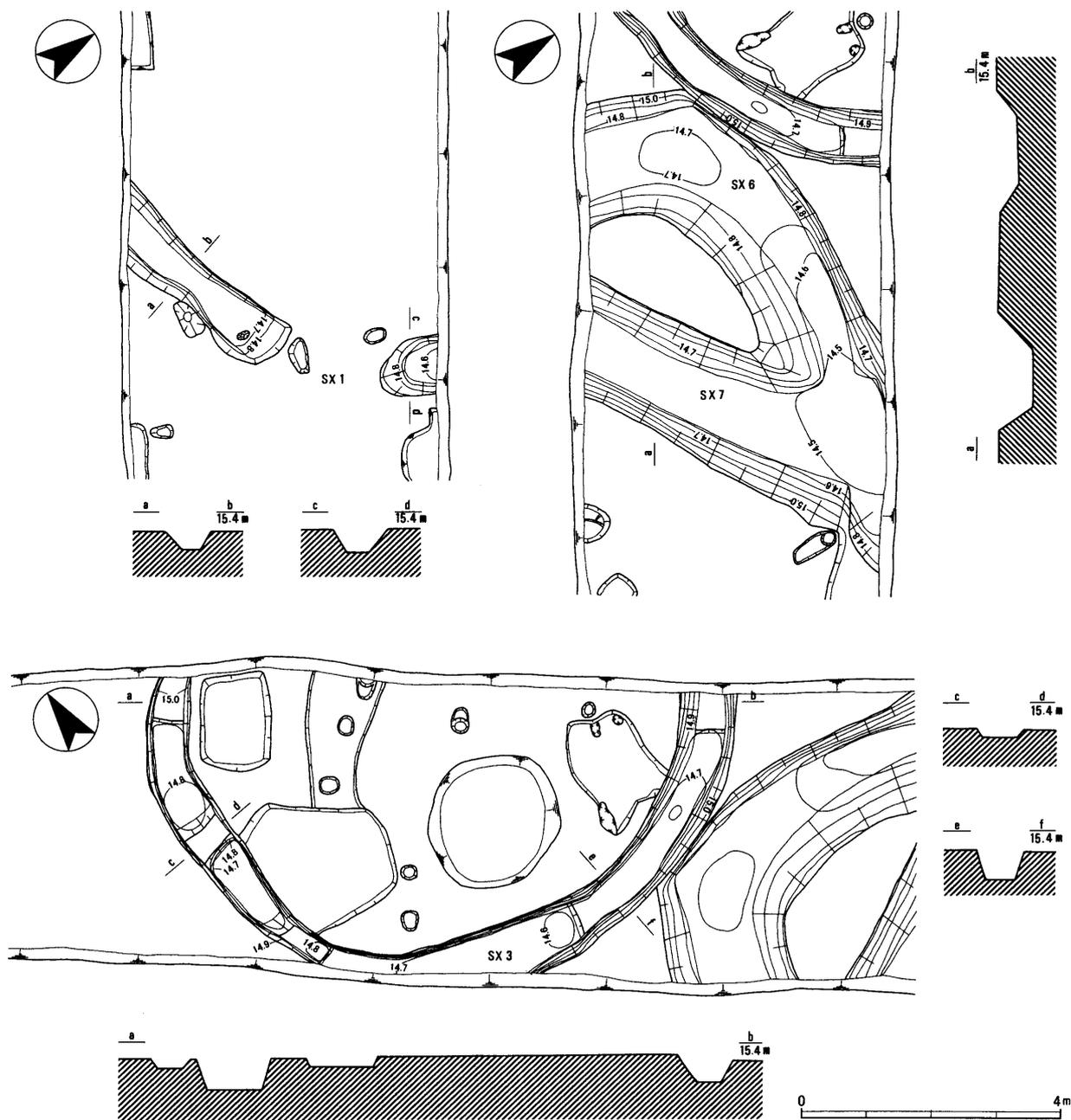
に大きくわけることができる。

以下、主な遺構について概述する。遺構の深さは全て検出面からの数値である。

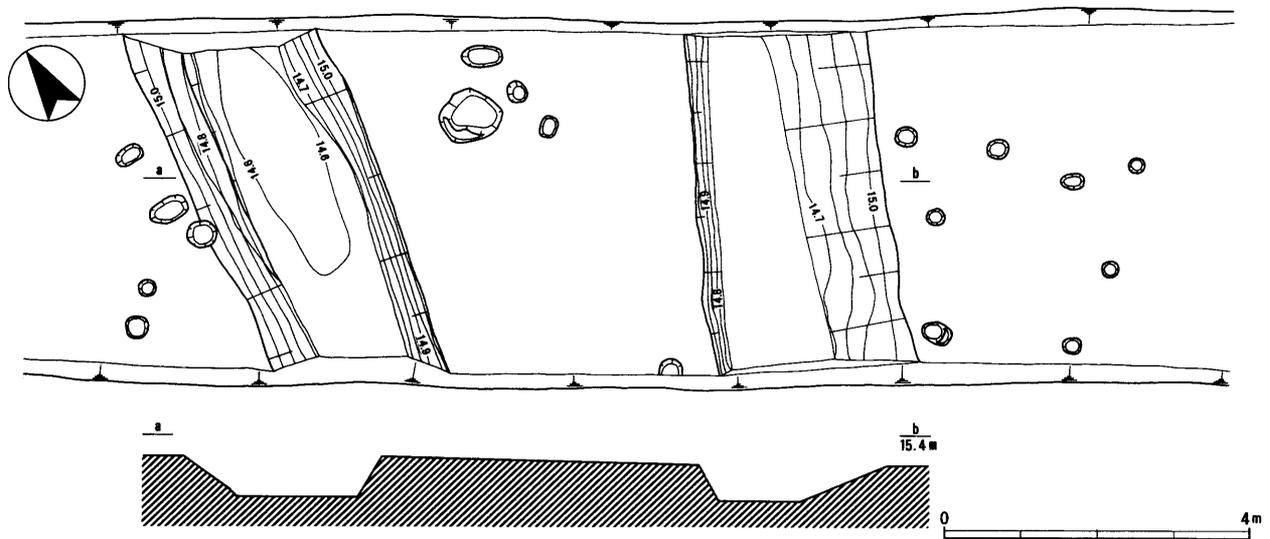
(1) 弥生時代

A 円形周溝墓

SX 3（第6図） A地区の西端部で周溝のみを検



第6図 SX1・SX3・SX6・SX7実測図及び断面図（1：100）



第7図 14号墳実測図及び断面図（1：100）

出した。周溝の内側の下端を基底線とすると、規模は径約8mである。周溝は南東側が幅0.9m・深さ0.5m、西側が幅0.7m・深さ0.38m、南側が幅0.9m・深さ0.5mである。SX6の周溝の北端の一部を切っている。周溝は調査区外に続くと推定される。埋土は2層に分けられ、上から黒褐色(10YR3/1)粘質土・暗褐色(10YR3/3)粘質土である。

周溝からは弥生土器の壺(1～10)・壺蓋(11)甕(12～17)・甕蓋(18)などが多数出土した。

これらの遺物により、時期は弥生時代前期と考えられる。

B 方形周溝墓

SX1 (第6図) B地区の西部で周溝の一部のみを検出した。周溝は東側が幅0.9m・深さ0.38m、南側が幅0.7m・深さ0.26mである。周溝は調査区外に続くと推定される。埋土は2層に分けられ、上から黒褐色(10YR3/2)粘質土・黒褐色(10YR2/2)粘質土である。

周溝からは弥生土器片が出土した。細片のみの出土のため、時期は不明である。

なお、調査時は、SD1・SD2の遺構番号を付けて遺物を取り上げた。

SX6 (第6図) A地区の西部で周溝の一部のみを検出した。周溝は最大幅2m・最深部0.4mである。SX3と7の周溝に北端の一部と東側が切られている。周溝は調査区外に続くと推定される。埋土

は2層に分けられる、上から黒褐色(10YR3/1)粘質土・暗褐色(10YR3/3)粘質土である。

周溝からは弥生土器の壺(19～22)・甕(23・24)などが多く出土した。

これらの遺物により、時期は弥生時代前期と考えられる。

SX7 (第6図) A地区の西部で周溝の一部のみを検出した。周溝は最大幅1.7m・最深部0.54mである。SX6の周溝の東側を切っている。周溝は調査区外に続くと推定される。埋土は2層に分けられ、上から黒褐色(10YR3/2)粘質土に黄褐色(10YR5/6)粘質土がまじる・灰黄褐色(10YR4/2)粘質土に黄褐色(10YR5/6)粘質土がまじる。

周溝からは弥生土器壺(25～36)・壺蓋(37)・甕(38～48)などが多数出土した。

これらの遺物により、時期は弥生時代前期と考えられる。

C 溝

SD9 A地区のほぼ中央部で検出した。東西の幅は2.6m・深さ0.1mで、南北の幅は2.7m以上・深さ0.1mである。SX7の周溝に北端部が切られている。溝は調査区外に続くと推定される。埋土は褐灰色(10YR4/1)粘質土である。

埋土からは弥生土器壺(49～54)・甕(55～57)などが多数出土した。これらの土器の大半は、埋土の上層より出土した。

これらの遺物により、時期は弥生前期と考えられる。

D 土坑

SK4 A地区の西端で検出した。長方形を呈し、ほぼ垂直に掘られている。規模は東西1.4m・南北1.6m・深さ0.4mである。埋土は灰黄褐色(10YR 4/2)粘質土に黄褐色(10YR 5/6)粘質土がまじる。

埋土からは弥生土器壺(58)・甕(59・60)などが多く出土した。

これらの遺物により、時期は弥生時代前期と考えられる。

また、香川県観音寺市樋ノ口遺跡^①で同時期の類似した規模の土壙墓が見つかっており、土壙墓の可能性も考えられる。

SK5 A地区の西部で検出した。不定形を呈し、規模は東西1.7m・南北1.5m・深さ0.1mである。東南部端部がSX3の周溝によって切られている。埋土は灰黄褐色(10YR 4/2)粘質土に黄褐色(10YR 5/6)粘質土がまじる。

埋土からは弥生土器壺蓋(61)・甕(62~64)などが少量出土した。

これらの遺物により、時期は弥生時代前期と考えられる。

SK8 A地区の西部で検出した。楕円形を呈し、規模は東西2m・南北2m・深さ0.12mである。西方がSX3の周溝によって切られている。埋土は灰黄褐色(10YR 4/2)粘質土に黄褐色(10YR 5/6)粘質土がまじる。

埋土からは弥生土器壺(65・66)・甕(67)などが少量出土した。

これらの遺物により、時期は弥生時代前期と考えられる。

(2) 古墳時代

A 古墳

14号墳(第7図) A地区の中央部で検出した。周東側の溝は最大幅2.4m・深さ0.49m、西側の溝が幅2.4m・深さ0.54mである。東側と西側の溝は調査区外に続くと推定される。

これらの溝の土層断面は類似しており、内側の断面に対し外側の断面が緩やかである。また、東側と西側の溝からは良く似た形の土師器高杯が出土した。過去の周辺の調査でも古墳の周溝が確認されている。

このことから、これらの溝は、古墳の周溝であると考えられる。

周溝のみの検出であるが、過去の調査の結果から方墳である可能性も考えられる。

埋土は3層に分けられ、上から黒褐色(10YR 3/1)粘質土に黄褐色(10YR 5/6)粘質土がまじる・黒褐色(10YR 3/1)粘質土・灰黄褐色(10YR 4/2)粘質土である。

周溝からは土師器高杯(68~71)や須恵器甕(72)などが出土した。

出土した土師器高杯(68)はほぼ完形で、墓前祭祀に使われていたと推察される。このことから、築造時期は古墳時代後期と考えられる。

なお、調査時は、SX10・SX11の遺構番号を付けて遺物を取り上げた。

B 溝

SD12 A地区の東端部で検出した。東西の幅3.9m以上・深さ0.3mで、南北の幅は2m・深さ0.3mである。溝は調査区外に続くと推定される。埋土は2層に分けられ、上から黒褐色(10YR 3/1)粘質土・黒褐色(10YR 3/1)粘質土に黄褐色(10YR 5/6)粘質土がまじる。

埋土からは土師器片などが少量出土した。古墳の周溝の可能性も考えられる。

〔註〕

① 以下、弥生土器の編年については、下記の文献による。

佐原 真「畿内地方」(『弥生土器集成本編』東京堂出版、1968年)。

② 片桐孝浩・信里芳紀「弥生時代の墓制について―樋ノ口遺跡の事例を中心に―」(『財団法人香川県埋蔵文化財調査センター研究紀要VI』、財団法人香川県埋蔵文化財調査センター、1998年)。

IV 遺物

今回の調査で出土した遺物は、整理箱にして16箱であった。これらの遺物は、弥生時代前期（前期新段階に相当すると考えられる^①）と古墳時代後期の2つの時期に大別できる。以下に特徴的な遺物について概略を述べる。個々の遺物の詳細については遺物観察表を参照されたい。

(1) 弥生時代前期の遺物

A SX3 出土遺物 (1~18)

壺(1~10)や壺蓋(11)、甕(12~17)、甕蓋(18)などが出土したが、小片である。

壺の口頸部に貼り付け突帯が巡っている(1)と、削り出し突帯上にヘラ描き沈線が施される(3・4)がある。他の(2・5~10)は、1~5条のヘラ描き沈線が施されている。(11)は口縁端部に面を持ち、中央には焼成前の穿孔がある。

甕は口縁端部に刻目が施されている(12・14)と、施されていない(13・15)に分けられる。これらには、半裁竹管による沈線(12)やハケ調整(13)、ヘラ描き沈線(14・15)が施されている。

B SX6 出土遺物 (19~24)

壺(19~22)や甕(23・24)などが出土したが、小片である。貼り付け突帯上に刺突文が施されるもの(19)や、口縁端部に刻目があり、頸胴部に2条のヘラ描き沈線が巡っているもの(23)・ヘラ描き沈線が施されるもの(20・24)がある。

C SX7 出土遺物 (25~48)

壺(25~36)や壺蓋(37)、甕(38~48)などが出土した。

壺には、中央に焼成前の穿孔がある(25)や、頸胴部に2条のヘラ描き沈線が施される(26)、口縁端部に面を持ち、沈線が巡らされている(27)、口縁端部には刻目があり、口頸部は刺突が施されている(28)がある。この内、(25・26)は、中段階に遡ると考えられる。また、小片であるが、削り出し突帯上にヘラ描き沈線が巡っている(29)や1条~3条のヘラ描き沈線が巡っている(30・31・33・34)がある。(37)の外面には木葉文が施されている。

甕は口縁端部に刻目が施されていない(38・39)

と、施されている(40~44)に分けられる。これらには、ハケ調整(38・40・43)や半裁竹管による沈線(39)、ヘラ描き沈線(41・42・44)が施されている。

D SD9 出土遺物 (49~57)

壺(49~54)や甕(55~57)などが出土したが、小片である。削り出し突帯上にヘラ描き沈線(49)やヘラ描き沈線(50・51)、ハケ調整(55)が施されているものがある。

E SK4 出土遺物 (58~60)

壺(58)や甕(59・60)などが出土したが、小片である。(59)の口縁端部には刻目が施され、頸胴部には2条のヘラ描き沈線が巡っている。

F SK5 出土遺物 (61~64)

壺蓋(61)や甕(62~64)などが出土したが、小片である。口縁端部に面を持ち、口縁部には焼成前の穿孔があるもの(61)や口縁端部に刻目が施され、ヘラ描き沈線が巡っているもの(62・63)がある。

G SK8 出土遺物 (65~67)

壺(65・66)や甕(67)などが出土したが、小片である。削り出し突帯上にヘラ描き沈線(65)やヘラ描き沈線(66)、口縁端部に刻目(67)が施されているものがある。

(2) 古墳時代後期の遺物

A 14号墳出土遺物 (68~72)

土師器高杯(68~71)や須恵器甕(72)などが出土した。(68)と(70)は良く似た形を呈している。(69・71)は脚部が残存している。(72)は頸部のみが残存している。

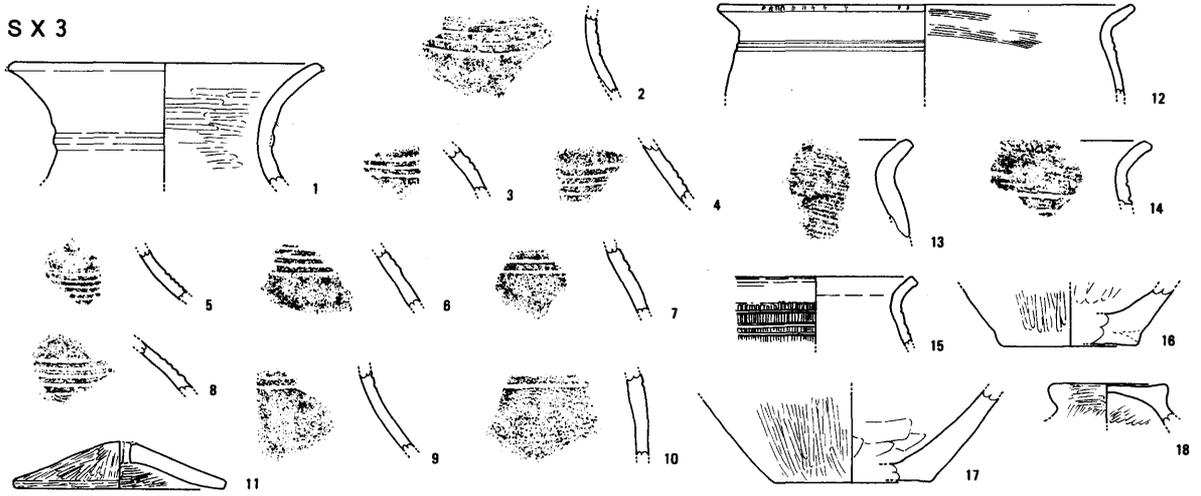
(3) 包含層などの出土遺物 (73~114)

これらは、弥生土器(73~105)や土師器(106~110)、磁器(111~113)、円筒埴輪(114)に分けられる。

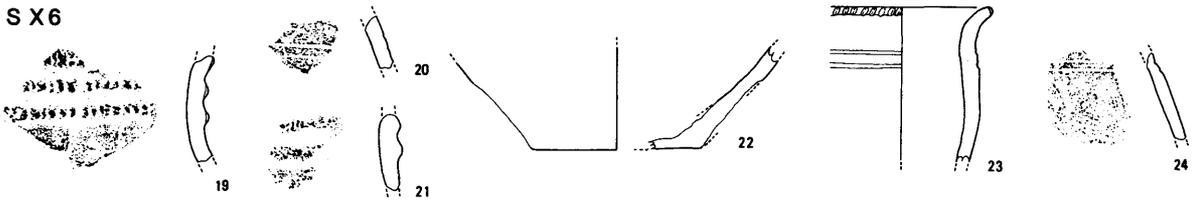
(73~87)は壺である。(73~75)は、口頸部の削り出し突帯上にヘラ描き沈線が巡っている。(74)には、口縁部に焼成前の穿孔がある。また、口頸部に1条の、頸胴部に2条のヘラ描き沈線が施されている(76)がある。他の(77~81)には2条~4条の

弥生時代前期の出土遺物

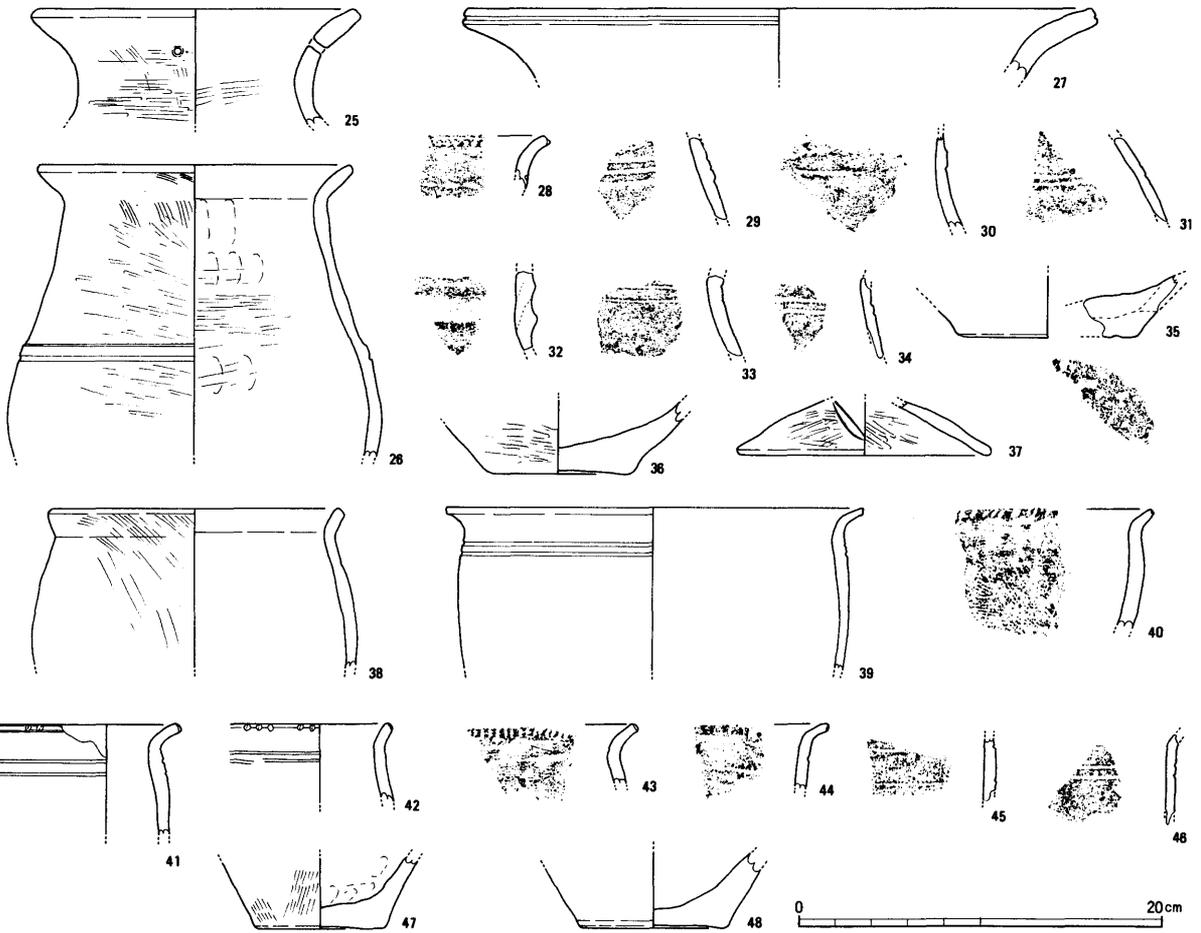
S X 3



S X 6



S X 7



第 8 図 出土遺物実測図 1 (1 : 4)

ヘラ描き沈線が施されている。

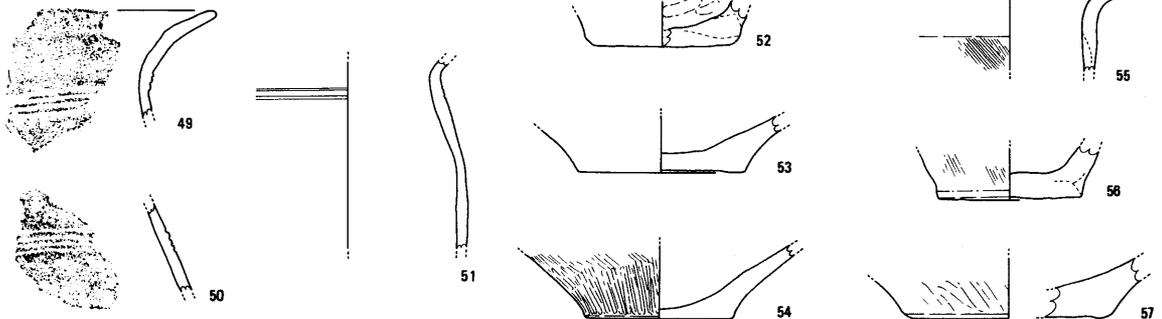
(88~104)は甕である。口縁端部に刻目が施されている(88~90・92~98・100)と、施されていない(91・99)に分けられる。これらには、削り出し突帯上にヘラ描き沈線が巡っている(100)やヘラ描き沈線(89・90・92・93・97~99)、半裁竹管による沈線(91・101)、中実の刺突(95)が施されているものがある。また、(88)は赤褐色を呈しており、垂流遠賀川式土器と考えられる²⁾。(101)は体部片で、頸胴部に半裁竹管による沈線が巡っている。

(105)は甑で、底部には焼成後穿孔がなされている。

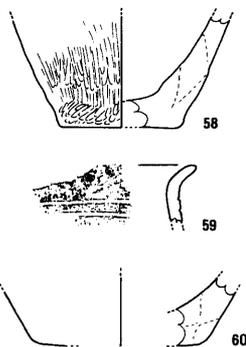
(106)は甕で、口縁部は内弯ぎみで、南伊勢地方で普遍的に見られないものである。(107)は高杯の杯部である。(108~110)は小皿で、伊藤裕偉氏による編年の南伊勢系A系統で、岩出遺跡群での分類Ⅱa期に相当する。13世紀のものと考えられる³⁾。(111)は青白磁壺形合子で、ほぼ完存している。(112)は龍泉窯系の青磁皿で、内面の底に草花文様がみられる。横田賢次郎・森田勉氏による磁器分類の龍泉窯系青磁皿Ⅰ類に相当する⁴⁾。12世紀~13世紀初めのものと考えられる。(113)は白磁皿で、内面の底に櫛状文の花文がみられる。横田賢次郎・森田勉氏による磁器分類の白磁皿Ⅷ-1類に相当する。これらの土師器小皿や青白磁壺形合子・青磁

弥生時代前期の出土遺物

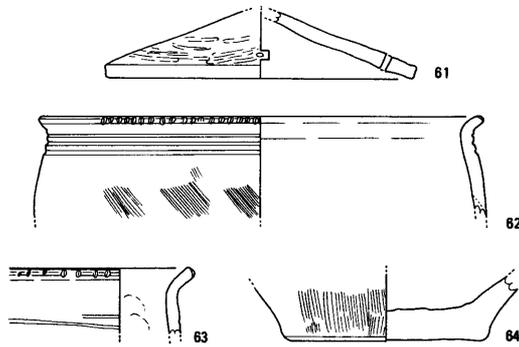
SD 9



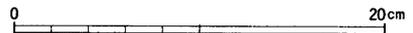
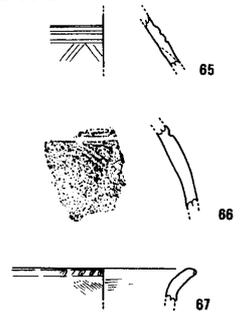
SK 4



SK 5

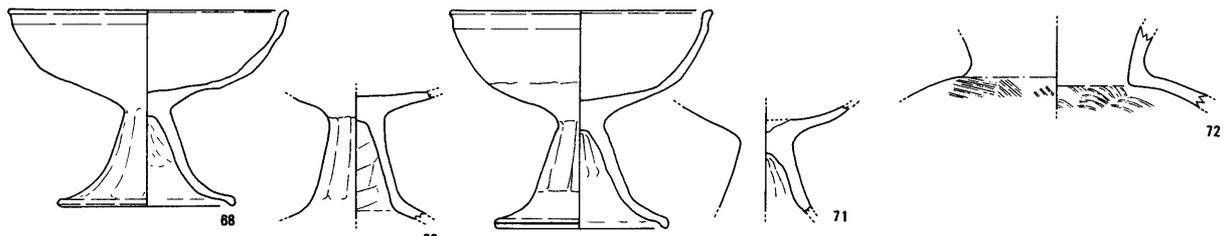


SK 8



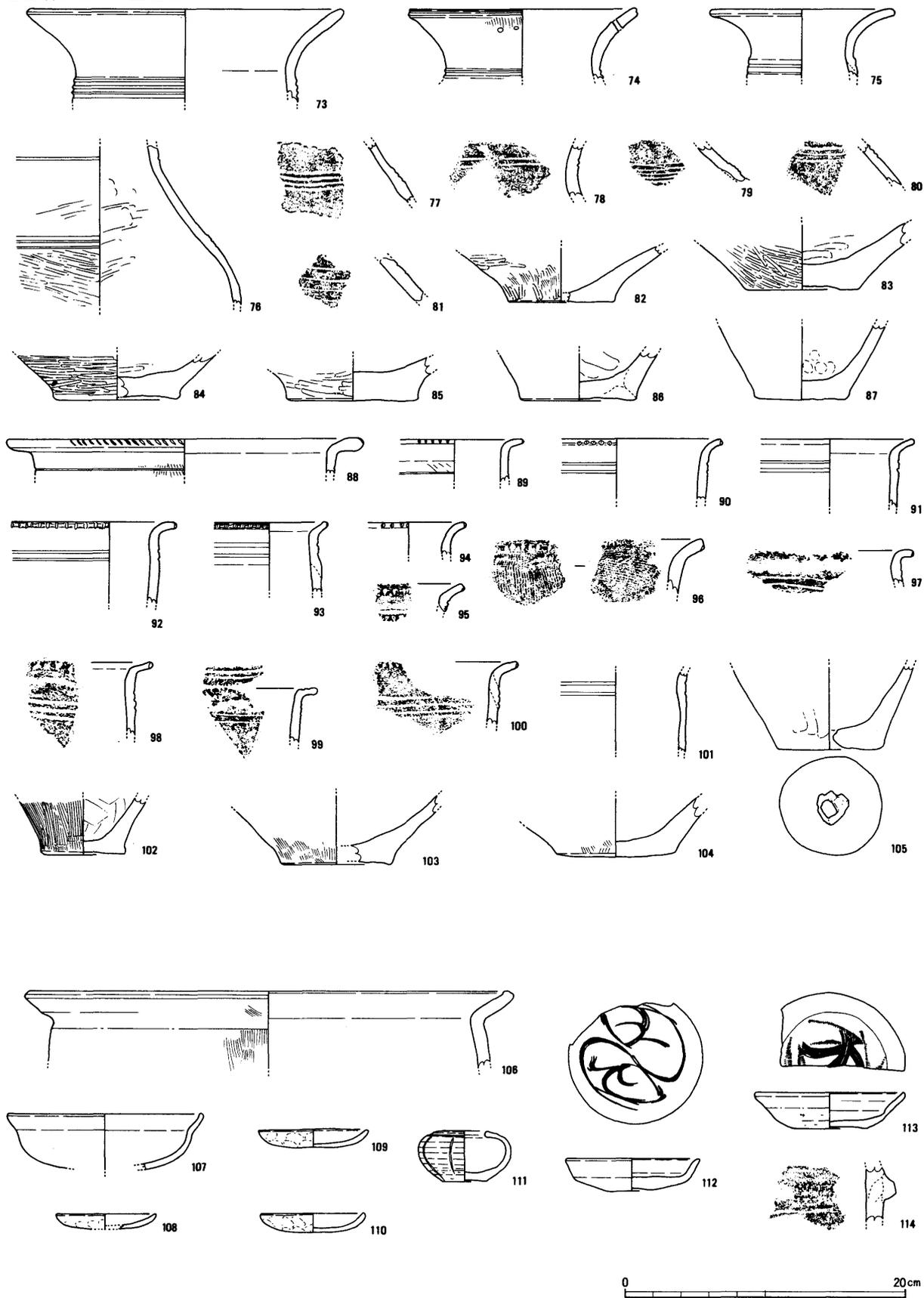
古墳時代後期の出土遺物

14号墳



第9図 出土遺物実測図2 (1:4)

包含層などの出土遺物



第10図 出土遺物実測図3 (1:4)

皿・白磁皿が出土したことから、今回の調査区周辺に中世墓が存在する可能性も考えられる^④。

【註】

① 以下、弥生土器の編年については、下記の文献による。

佐原 真「畿内地方」(『弥生土器集成本編』東京堂出版、1968年)。

② 紅村 弘「東海西部」(『弥生土器』I、ニュー・サイエンス社、1983年)。

③ 伊藤裕偉『多気遺跡群発掘調査報告』(三重県埋蔵文化財センター、1993年)。

伊藤裕偉『岩出地区内遺跡群発掘調査報告』(三重県埋蔵文化財センター、1996年)。

④ 以下、磁器の編年については、下記の文献による。

横田賢次郎・森田 勉「大宰府出土の輸入中国陶磁器について」(『九州歴史資料館研究論集4』九州歴史資料館、1978年)。

⑤ 貿易陶磁器を副葬した墓としては、桑名郡多度町宮地中世墓群3号墓〔文献a〕や津市雲出島貫町雲出島貫遺跡木棺墓S X 329〔文献b〕などがあげられる。

〔文献a〕竹内英昭『宮地中世墓群発掘調査報告』(三重県埋蔵文化財センター、1997年)。

〔文献b〕伊藤裕偉『嶋抜II』(三重県埋蔵文化財センター、2000年)。

番号	実測番号	器種	出土位置		計測値 (cm)		調整・技法の特徴	胎土	焼成	色調	残存度	備考
			地区	遺構	口径	器高						
1	001-02	弥生土器壺	B2	S X3	17.5		外：ナデ・貼り付け突帯 内：ミガキ	粗 ～2mmの砂多く含む	並	10YR7/4 にぶい黄橙	1/5	
2	002-05	弥生土器壺	B2	S X3			外：ミガキ・ヘラ描き沈線 内：ナデ	粗 ～2mmの砂多く含む	並	10YR7/4 にぶい黄橙	体部片	
3	003-05	弥生土器壺	B4	S X3			外：削り出し突帯、ミガキ・ヘラ描き沈線 内：ナデ・オサエ	やや粗 ～1mmの砂多く含む	並	7.5YR6/6 橙	体部片	
4	002-06	弥生土器壺	B2	S X3			外：ミガキ・削り出し突帯上にヘラ描き沈線 内：ミガキ	粗 ～1.5mmの砂多く含む	並	10YR7/4 にぶい黄橙	体部片	
5	003-07	弥生土器壺	B3	S X3			外：ミガキ・ヘラ描き沈線 内：ナデ	粗 ～1.5mmの砂多く含む	並	10YR7/4 にぶい黄橙	体部片	
6	003-01	弥生土器壺	B2	S X3			外：ヘラ描き沈線、削り出し 内：ナデ	粗 ～2mmの砂多く含む	並	7.5YR6/6 橙	体部片	
7	003-03	弥生土器壺	B4	S X3			外：ミガキ・ヘラ描き沈線 内：ナデ	粗 ～2.5mmの砂多く含む	並	10YR6/4 にぶい黄橙	体部片	
8	002-08	弥生土器壺	B2	S X3			外：ミガキ・ヘラ描き沈線、削り出し 内：ナデ	粗 ～1.5mmの砂多く含む	並	5YR6/6 橙	体部片	
9	002-07	弥生土器壺	B2	S X3			外：ミガキ・ヘラ描き沈線 内：ナデ	粗 ～1.5mmの砂多く含む	並	10YR7/3 にぶい黄橙	体部片	
10	003-02	弥生土器壺	B4	S X3			外：ヘラ描き沈線 内：ナデ	粗 ～1.5mmの砂多く含む	並	10YR6/4 にぶい黄橙	体部片	
11	002-03	弥生土器壺蓋	B4	S X3	11.5	2.6	外：ミガキ 内：ミガキ	粗 ～2mmの砂多く含む	並	10YR5/3 にぶい黄褐	口縁部 1/6	焼成前 穿孔有り
12	001-01	弥生土器甕	B2	S X3	23.2		外：ヨコナデ・刻目、半裁竹管による沈線、ナデ 内：ヨコナデ、ナデ	粗 ～1.5mmの砂多く含む	並	7.5YR7/6 橙	口縁部 1/7	
13	003-08	弥生土器甕	B4	S X3			外：ヨコナデ、ハケ後ヨコナデ、ハケメ 内：ヨコナデ	粗 ～2mmの砂多く含む	並	10YR7/4 にぶい黄橙	口縁部片	
14	003-04	弥生土器甕	B3	S X3			外：ヨコナデ・刻目、ハケ後ミガキ・ヘラ描き沈線 内：ヨコナデ	粗 ～2mmの砂多く含む	並	7.5YR5/4 にぶい褐	口縁部片	
15	002-04	弥生土器甕	B2	S X3			外：ヨコナデ、ミガキ・ヘラ描き沈線 内：ヨコナデ、ナデ	粗 ～3mmの砂多く含む	並	10YR5/2 灰黄褐	口縁部片	
16	001-03	弥生土器甕	B3	S X3	底径 7.6		外：ハケ後ミガキ 内：ナデ	粗 ～2mmの砂多く含む	並	10YR6/4 にぶい黄橙	底部 5/8	
17	001-04	弥生土器甕	B4	S X3	底径 8.5		外：ミガキ 内：ナデ	粗 ～2mmの砂多く含む	並	10YR6/4 にぶい黄橙	底部 1/4	
18	002-02	弥生土器甕蓋	B4	S X3	つまみ径 6.7		外：ミガキ 内：ミガキ	粗 ～2.5mmの砂多く含む	並	7.5YR6/4 にぶい橙	つまみ部 一部欠損	外面に 黒斑あり
19	006-08	弥生土器壺	B4	S X6			外：ナデ・貼り付け突帯上に刺突 内：ナデ	やや粗 1～2mmの砂含む	並	5YR6/4 にぶい橙	体部片	
20	006-04	弥生土器壺	B5	S X6			外：ナデ・ヘラ描き沈線 内：ナデ	やや粗 1～3mmの砂含む	並	10YR8/4 浅黄橙	体部片	
21	006-03	弥生土器壺	B4	S X6			外：ナデ 内：ナデ	やや粗 1～2mmの砂含む	並	10YR8/4 浅黄橙	体部片	
22	005-02	弥生土器壺	B4	S X6	底径 9.4		外：ナデ 内：ナデ 底部外面：ナデ	粗 1～2mmの砂含む	並	外：5YR6/6 橙 内：10YR7/4 にぶい黄橙	1/4	剥離激しい
23	005-03	弥生土器甕	B4	S X6			外：ヨコナデ・刻目、ナデ・ヘラ描き沈線 内：ヨコナデ、ナデ	やや粗 1～4mmの砂含む	並	10YR7/4 にぶい黄橙	口縁部片	
24	006-05	弥生土器甕	B5	S X6			外：ミガキ・ヘラ描き沈線 内：ナデ	やや粗 1～2mmの砂含む	並	外：7.5YR7/4 にぶい橙 内：5YR7/6 橙	体部片	
25	007-04	弥生土器壺	B6	S X7	18.0		外：ヨコナデ、ミガキ 内：ヨコナデ、ハケメ	粗 ～1.5mmの砂粒多く含む	並	外：7.5YR6/4 にぶい橙 内：7.5YR6/6 橙	口縁部 1/7	焼成前 穿孔有り
26	007-01	弥生土器壺	B5	S X7	17.5		外：ヨコナデ、ハケメ、ミガキ・ヘラ描き沈線 内：ヨコナデ、オサエ・ナデ	粗 ～1.5mmの砂粒含む	並	外：7.5YR7/6, 6/6 橙 内：10YR7/4 にぶい黄橙	口縁部 1/4	外面黒変
27	008-01	弥生土器壺	B5	S X7	35.0		外：ヨコナデ・沈線 内：ヨコナデ	粗 ～1.5mmの小石・砂粒含む	並	外：10YR7/4 にぶい黄橙 内：2.5Y7/2 灰黄	口縁部 1/11	
28	006-02	弥生土器壺	B5	S X7			外：ヨコナデ・刻目、ハケメ、刺突 内：ヨコナデ、ハケメ	やや粗 1～2mmの砂含む	並	外：10YR5/2 灰黄褐 内：7.5YR8/4 浅黄橙	口縁部片	
29	006-06	弥生土器壺	A5	S X7			外：ナデ、削り出し突帯・ヘラ描き沈線 内：ナデ	やや粗 1～3mmの砂含む	並	外：10YR7/4 にぶい黄橙 内：7.5YR7/4 にぶい橙	体部片	
30	009-01	弥生土器壺	B5	S X7			外：ナデ・ミガキ・ヘラ描き沈線 内：ミガキ	やや粗 ～2mmの砂粒含む	並	外：7.5YR7/6 橙 内：7.5YR6/6 橙	体部片	
31	009-05	弥生土器壺	B5	S X7			外：ナデ・ヘラ描き沈線 内：ナデ	粗 ～1.5mmの砂粒含む	並	外：7.5YR6/4 にぶい橙 内：10YR7/4 にぶい黄橙	体部片	
32	006-07	弥生土器壺	B5	S X7			外：調整不明 内：ナデ	やや粗 1～2mmの砂含む	並	外：10YR8/4 浅黄橙 内：N3/0 暗灰	体部片	
33	009-02	弥生土器壺	B5	S X7			外：ミガキ・ヘラ描き沈線 内：ナデ	粗 ～2mmの砂粒含む	並	外：2.5Y7/2 灰黄 内：10YR7/6 明黄褐	体部片	
34	009-04	弥生土器壺	B5	S X7			外：ナデ・ヘラ描き沈線 内：ナデ	粗 ～1mmの砂粒含む	並	外：2.5Y4/1 黄灰 内：10YR5/3 にぶい黄褐	体部片	
35	004-06	弥生土器壺	B5	S X7	底径 10.0		外：ナデ 内：ナデ 底部外面：ナデ・モミガラ圧痕	やや粗 1～2mmの砂含む	並	7.5YR7/6 橙	底部 1/4	
36	007-02	弥生土器壺	B5	S X7	底径 8.0		外：ミガキ 内：ナデ 底部外面：ナデ	粗 ～1.5mmの砂粒多く含む	並	外：10YR7/4, 6/4 にぶい黄橙 内：2.5Y5/2 暗灰黄	底部完存	
37	008-02	弥生土器壺蓋	B6	S X7	14.0		外：ミガキ・木葉文 内：ミガキ	やや密 微砂粒含む	並	10YR7/4 にぶい黄橙	1/8	内面黒変
38	007-03	弥生土器甕	B5	S X7	16.5		外：ヨコナデ・ハケメ 内：ヨコナデ、ナデ	粗 ～2mmの砂粒多く含む	並	外：10YR5/3 にぶい黄褐 内：10YR6/3 にぶい黄橙	口縁部 1/7	外面に 煤付着
39	005-01	弥生土器甕	B5	S X7	23.0		外：ナデ、半裁竹管による沈線、ナデ 内：ナデ	やや粗 1～2mmの砂含む	並	外：10YR8/4 浅黄橙 内：5YR7/4 にぶい橙	口縁部片	

第2表 出土遺物観察表1

番号	実測番号	器種	出土位置		計測値 (cm)		調整・技法の特徴	胎土	焼成	色調	残存度	備考
			地区	遺構	口径	器高						
40	008-03	弥生土器 甕	B5	SX7			外：ヨコナデ・刻目、ハケメ 内：ヨコナデ、オサエ・ナデ	やや粗 ～1.5mmの砂粒多く含む	並	外：10YR6/2 灰黄褐色 内：7.5YR7/4 にぶい橙	口縁部片	
41	005-06	弥生土器 甕	B5	SX7			外：ヨコナデ・刻目、ナデ・ヘラ描き沈線 内：ヨコナデ、ナデ	やや粗 1～2mmの砂含む	並	10YR7/4 にぶい黄橙	口縁部片	
42	005-04	弥生土器 甕	B5	SX7			外：ヨコナデ・刻目、ナデ・ヘラ描き沈線 内：ヨコナデ、ナデ	やや粗 1～3mmの砂含む	並	10YR8/3 浅黄橙	口縁部片	
43	006-01	弥生土器 甕	B5	SX7			外：ヨコナデ・刻目、ハケメ 内：ヨコナデ、ナデ・オサエ	やや粗 1～2mmの砂含む	並	外：7.5YR5/3 にぶい褐色 内：7.5YR7/4 にぶい橙	口縁部片	
44	008-04	弥生土器 甕	B6	SX7			外：ヨコナデ・刻目・ヘラ描き沈線 内：ヨコナデ	やや粗 ～2mmの砂粒含む	並	外：5YR6/6 橙 内：7.5YR6/4 にぶい橙	口縁部片	
45	008-05	弥生土器 甕	B6	SX7			外：ハケメ・ヘラ描き沈線 内：ナデ	やや密 ～1.5mmの砂粒含む	並	10YR7/4 にぶい黄橙	体部片	
46	009-03	弥生土器 甕	B5	SX7			外：ナデ・ヘラ描き沈線 内：ナデ	やや粗 ～1mmの砂粒含む	並	外：10YR7/3 にぶい黄橙 内：10YR7/4 にぶい黄橙	体部片	
47	004-03	弥生土器 甕	B5	SX7	底径 7.4		外：ハケメ 内：オサエ・ナデ 底部外面：ナデ	粗 1～2mmの砂含む	並	外：10YR7/4 にぶい黄橙 内：7.5YR8/4 浅黄橙	底部 1/3	
48	004-04	弥生土器 甕	A5	SX7	底径 8.2		外：ナデ 内：ナデ 底部外面：ナデ	粗 1～2mmの砂含む	並	外：10YR7/4 にぶい黄橙 内：10YR8/4 浅黄橙	底部 1/4	
49	012-04	弥生土器 壺	A6	SD9			外：ナデ、削り出し突帯上にヘラ描き沈線、ナデ 内：ナデ	やや粗 ～3mmの砂粒含む	並	10YR7/4 にぶい黄橙	口縁部片	
50	012-05	弥生土器 壺	A6	SD9			外：ナデ・ヘラ描き沈線 内：ナデ	やや粗 ～2mmの砂粒含む	並	10YR6/4 にぶい黄橙	体部片	
51	012-01	弥生土器 壺	A6	SD9			外：ナデ・ヘラ描き沈線 内：ナデ	やや粗 ～5mmの小石含む	並	10YR6/3 にぶい黄橙	体部片	
52	011-03	弥生土器 壺	A6	SD9	底径 8.0		外：ナデ 内：ナデ 底部外面：ナデ	粗 ～3mmの砂粒含む	並	10YR7/4 にぶい黄橙	底部 1/3	
53	010-04	弥生土器 壺	B6	SD9	底径 9.0		外：ナデ 内：ナデ 底部外面：ナデ	やや粗 ～4mmの小石含む	並	7.5YR7/4 にぶい橙	底部 1/2	剥離激しい
54	010-03	弥生土器 壺	A6	SD9	底径 8.0		外：ミガキ 内：ナデ 底部外面：ナデ	粗 ～3mmの砂粒含む	並	10YR7/3 にぶい黄橙	底部 1/2	
55	012-02	弥生土器 甕	A6	SD9			外：ナデ、ハケメ 内：ナデ	やや粗 ～2.5mmの砂粒含む	並	7.5YR6/4 にぶい橙	口縁部片	
56	011-02	弥生土器 甕	A6	SD9	底径 8.0		外：ハケメ 内：ナデ 底部外面：ナデ	粗 ～3.5mmの小石含む	並	10YR6/4 にぶい黄橙	底部 2/3	
57	011-01	弥生土器 甕	B6	SD9	底径 11.5		外：ミガキ 内：ナデ 底部外面：ナデ	やや粗 ～3mmの砂粒含む	並	外：10YR6/3 にぶい黄橙 内：7.5Y4/1 灰	底部 1/4	
58	001-06	弥生土器 壺	A3	SK4	底径 6.3		外：ミガキ、ナデ 内：ナデ 底部外面：ナデ	粗 ～2mmの砂多く含む	並	外：5YR7/6 橙 内：10YR7/4 にぶい黄橙	底部 1/6	
59	003-06	弥生土器 甕	A3	SK4			外：ヨコナデ・刻目、ミガキ・ヘラ描き沈線 内：ヨコナデ、ナデ	粗 ～2mmの砂多く含む	並	10YR6/3 にぶい黄橙	口縁部片	外面に 係付着
60	001-05	弥生土器 甕	A3	SK4	底径 9.0		外：表面摩擦のため調整不明 内：表面摩擦のため調整不明	粗 ～2mmの砂多く含む	並	5YR6/6 橙	底部 1/4	
61	004-02	弥生土器 壺蓋	B4	SK5	16.8		外：ナデ、ミガキ 内：ナデ	やや密 1mmの砂含む	並	10YR7/3 にぶい黄橙	1/6	焼成前 穿孔有り
62	004-01	弥生土器 甕	B4	SK5	24.0		外：ナデ、刻目、ヘラ描き沈線、ナデ、ハケメ 内：ナデ	やや粗 1～2mmの砂含む	並	外：10YR8/4 浅黄橙 内：10YR7/3 にぶい黄橙	口縁部 1/8	外面に 係付着
63	005-05	弥生土器 甕	B4	SK5			外：ヨコナデ・刻目、ナデ・ヘラ描き沈線 内：ヨコナデ、オサエ・ナデ	やや粗 1～4mmの砂含む	並	10YR8/4 浅黄橙	口縁部片	
64	004-05	弥生土器 甕	B4	SK5	底径 11.0		外：ハケメ 内：ナデ 底部外面：ナデ	やや粗 1～2mmの砂含む	並	外：10YR8/4 浅黄橙 内：10YR8/3 浅黄橙	底部 1/3	
65	012-07	弥生土器 壺	B3	SK8			外：削り出し突帯上にヘラ描き沈線 内：ナデ	やや粗	並	10YR7/3 にぶい黄橙	体部片	
66	012-06	弥生土器 壺	B3	SK8			外：ナデ、ヘラ描き沈線、ハケメ 内：ナデ	やや粗 ～3mmの砂粒含む	並	10YR6/3 にぶい黄橙	体部片	
67	012-03	弥生土器 甕	B3	SK8			外：ナデ、刻目、ハケメ 内：ナデ・ハケメ	やや粗 ～2mmの砂粒含む	並	外：5Y3/1 オリーブ黒 内：10YR8/4 浅黄橙	口縁部片	
68	010-02	土師器 高杯	B8	14号墳	15.0 底径9.5	10.8	外：ナデ 杯部内：ナデ 脚部内：ナデ	やや粗 ～4mmの小石含む	並	7.5YR6/6 橙	ほぼ存存	摩擦激しい
69	013-02	土師器 高杯	B10	14号墳			外：ナデ、面取り風ナデ、ナデ 杯部内：ナデ 脚部内：ケズリ、ナデ	やや密 微砂粒含む	並	10YR7/4 にぶい黄橙	体部片	
70	013-01	土師器 高杯	B10	14号墳	14.5 底径 9.3	12.0	外：ヨコナデ、ナデ、面取り風ナデ ヨコ方向ナデ・沈線 杯部内：ヨコナデ、ナデ 脚部内：シボリ痕、ヨコ方向ナデ	やや密 ～5mmの小石、砂粒含む	並	7.5YR7/6 橙	1/4	
71	013-03	土師器 高杯	B8	14号墳			外：ナデ 杯部内：ナデ 脚部内：シボリ痕	やや密 ～1.5mmの砂粒含む	並	5YR6/6 橙	体部片	
72	010-01	須恵器 甕	B8	14号墳	頸部 11.0		外：ククロナデ、タタキ 内：ククロナデ、青海波	やや粗 ～3mmの砂粒含む	並	5Y7/2 灰白	頸部 1/3	
73	017-02	弥生土器 壺	B6	包含層	22.5		外：削り出し突帯上にヘラ描き沈線 内：表面摩擦のため調整不明	粗 ～3.5mmの砂粒含む	並	外：7.5YR7/6, 6/6 橙 内：10YR7/4, 6/4 にぶい黄橙	口縁部 1/6	
74	016-02	弥生土器 壺	B7	包含層	16.3		外：ハケメ、ナデ・ミガキ、削り出し突帯上に ヘラ描き沈線 内：表面摩擦のために調整不明	粗 ～1.5mmの砂粒含む	並	外：7.5YR7/4 にぶい橙 内：10YR7/4 にぶい黄橙	口縁部 1/5	焼成前 穿孔有り
75	020-05	弥生土器 壺	B4	攪乱	13.2		外：削り出し突帯上にヘラ描き沈線 内：表面剥離のため調整不明	粗 ～3mmの砂多く含む	並	10YR7/4 にぶい黄橙	口縁部 1/6	
76	014-01	弥生土器 壺	A地区	表土			外：ミガキ・ヘラ描き沈線 内：ミガキ	粗 ～4mmの小石、砂粒含む	並	外：10YR6/4 にぶい黄橙 内：10YR7/4 にぶい黄橙	体部片	
77	015-02	弥生土器 壺	A地区	表土			外：ミガキ・ヘラ描き沈線 内：ミガキ	粗 ～1.5mmの砂粒含む	並	7.5YR7/4 にぶい橙	体部片	

第3表 出土遺物観察表2

番号	実測番号	器種	出土位置		計測値 (cm)		調整・技法の特徴	胎土	焼成	色調	残存度	備考
			地区	遺構	口径	器高						
78	018-03	弥生土器壺	B7	包含層			外：ミガキ・ヘラ描き沈線 内：ナデ	粗 ～3mmの砂粒含む	並	7.5YR6/4にぶい橙	体部片	
79	021-03	弥生土器壺	B7	包含層			外：ミガキ・ヘラ描き沈線、削り出し 内：ナデ	粗 ～2mmの砂多く含む	並	外：10YR5/3 にぶい黄褐 内：10YR7/4 にぶい黄橙	体部片	
80	021-06	弥生土器壺	B7	包含層			外：ミガキ・ヘラ描き沈線 内：表面摩滅のため調整不明	粗 ～2mmの砂多く含む	並	7.5YR7/6 橙	体部片	
81	015-03	弥生土器壺	B10	14号墳			外：ミガキ・ヘラ描き沈線 内：ミガキ	やや粗 ～1.5mmの砂粒含む	並	10YR7/4 にぶい黄橙	体部片	
82	016-06	弥生土器壺	B6	包含層	底径 7.7		外：ハケメ・ミガキ 内：ナデ 底部外面：ナデ	粗 ～3mmの砂粒含む	並	10YR7/4 にぶい黄橙	底部 1/3	
83	020-02	弥生土器壺	B4	攪乱	底径 8.0		外：ミガキ 内：ナデ 底部外面：ケズリ	粗 ～1.5mmの砂多く含む	並	7.5YR7/6 橙	底部 1/2	
84	020-03	弥生土器壺	C4	包含層	底径 8.9		外：ミガキ 内：ナデ 底部外面：ナデ	粗 ～3mmの砂多く含む	並	2.5YR6/6 橙	底部 1/3	
85	016-03	弥生土器壺	A7	包含層	底径 9.4		外：ミガキ 内：ナデ 底部外面：ミガキ	粗 ～4mmの砂粒含む	並	外：7.5YR7/4 にぶい橙 内：10YR6/2, 5/2 灰黄褐	底部 1/3	
86	017-01	弥生土器壺	B6	包含層	底径 8.2		外：表面摩滅のため調整不明 内：ナデ 底部外面：ナデ	粗 ～3mmの砂粒含む	並	外：2.5YR5/6 明赤褐 内：10YR6/4, 6/3 にぶい黄橙	底部 1/2	
87	020-04	弥生土器壺	B7	包含層	底径 6.8		外：ナデ 内：ナデ・オサエ 底部外面：ナデ	粗 ～2mmの砂多く含む	並	7.5YR7/6 橙	底部完存	
88	013-05	弥生土器甕	A地区	表土	25.5		外：ナデ・刻目、ハケメ・ヘラ描き沈線 内：ナデ	粗 ～2mmの砂粒含む	並	外：2.5YR6/6 橙 内：2.5YR5/6 明赤褐	口縁部 1/5	外面に煤付着 垂流遺物川式
89	014-04	弥生土器甕	A8	14号墳			外：ヨコナデ・刻目、ハケメ・ヘラ描き沈線 内：ヨコナデ	やや粗 ～1mmの砂粒含む	並	10YR8/4 浅黄橙	口縁部片	
90	020-06	弥生土器甕	B3	攪乱			外：ヨコナデ・刻目、ミガキ・ヘラ描き沈線 内：ヨコナデ	粗 ～3mmの砂多く含む	並	10YR5/2 灰黄褐	口縁部片	外面に 煤付着
91	014-02	弥生土器甕	A7	包含層			外：ヨコナデ、ナデ・半裁竹管による沈線 内：ヨコナデ、ナデ	粗 ～1.5mmの砂粒多く含む	並	外：10YR5/3 にぶい黄褐 内：10YR7/4 にぶい黄橙	口縁部片	
92	016-01	弥生土器甕	B7	包含層			外：ヨコナデ・刻目、ヘラ描き沈線 内：表面摩滅のため調整不明	粗 ～3mmの砂粒含む	並	外：7.5YR5/4 にぶい褐 内：10YR6/4 にぶい黄橙	口縁部片	
93	018-01	弥生土器甕	B7	包含層			外：ヨコナデ・刻目、ヘラ描き沈線 内：ナデ	粗 ～3mmの砂粒含む	並	7.5YR7/4, 6/4 にぶい橙	口縁部片	
94	014-03	弥生土器甕	B8	14号墳			外：ヨコナデ・刻目 内：ヨコナデ	やや粗 ～1.5mmの砂粒含む	並	10YR7/4 にぶい黄橙	口縁部片	
95	015-04	弥生土器甕	B8	14号墳			外：ヨコナデ・刻目、ヘラ描き沈線、中実の刺突 内：ヨコナデ	やや粗 微砂粒含む	並	10YR7/4 にぶい黄橙	口縁部片	
96	021-05	弥生土器甕	B12	攪乱			外：ヨコナデ・刻目、ハケメ 内：ハケメ	粗 ～2mmの砂多く含む	並	10YR7/4 にぶい黄橙	口縁部片	
97	018-02	弥生土器甕	B6	包含層			外：ヨコナデ・刻目・ナデ・ヘラ描き沈線 内：ヨコナデ	やや粗 ～2.5mmの砂粒含む	並	外：7.5YR7/4 にぶい橙 内：7.5YR8/4 浅黄橙	口縁部片	
98	015-01	弥生土器甕	B3	包含層			外：ヨコナデ・刻目、ナデ・ヘラ描き沈線 内：ヨコナデ、ナデ	やや粗 ～2.5mmの砂粒含む	並	外：10YR6/4 にぶい黄橙 内：10YR7/4 にぶい黄橙	口縁部片	
99	018-05	弥生土器甕	B6	包含層			外：ナデ・ヘラ描き沈線 内：ナデ・横線	やや粗 ～2mmの砂粒含む	並	7.5YR6/4 にぶい橙	口縁部片	
100	018-04	弥生土器甕	B6	包含層			外：刻目、ヨコナデ、削り出し突帯上へヘラ描き沈線 内：ナデ	粗 ～2.5mmの砂含む	並	10YR5/3 にぶい黄褐	口縁部片	
101	014-05	弥生土器甕	A地区	表土			外：ナデ・半裁竹管による沈線 内：ナデ	粗 ～1.5mmの砂粒含む	並	外：10YR6/3 にぶい黄橙 内：10YR7/3 にぶい黄橙	体部片	
102	016-05	弥生土器甕	B6	包含層	底径 6.0		外：ハケメ 内：ナデ 底部外面：オサエ	粗 ～3.5mmの砂粒含む	並	外内：2.5Y3/1 黒褐 内：2.5Y5/2 暗灰黄	底部完存	
103	016-04	弥生土器甕	B7	包含層	底径 8.0		外：ハケメ 内：ナデ 底部外面：ナデ	粗 ～3mmの砂粒含む	並	外：7.5YR6/4 にぶい橙 内：10YR6/4 にぶい黄橙	底部 1/3	
104	013-04	弥生土器甕	A地区	表土	底径 9.0		外：ハケメ 内：オサエ・ナデ 底部外面：ナデ	粗 ～3.5mmの小石、砂粒含む	並	外：7.5YR5/4 にぶい褐 内：2.5Y5/2 暗灰黄	底部完存	
105	020-01	弥生土器甕	B4	攪乱	底径 7.4		外：ナデ 内：ナデ 底部外面：ナデ	粗 ～2.5mmの砂多く含む	並	10YR7/4 にぶい黄橙	底部完存	焼成後 穿孔有り
106	021-01	土師器甕	B8	包含層	35.0		外：ヨコナデ（ハケメ残あり）、ハケメ 内：ヨコナデ	やや粗 ～2mmの砂多く含む	並	10YR7/3 にぶい黄橙	口縁部 1/8	外面に 煤付着
107	014-06	土師器高杯	B地区	表土	14.0		外：ヨコナデ、ナデ 内：ヨコナデ、ナデ	やや密	並	5YR6/6 橙	杯部 1/8	
108	017-03	土師器小皿	B7	包含層	7.0	1.1	外：オサエ 内：ナデ	やや密 ～1mmの砂粒含む	並	7.5YR7/6 橙	1/3	
109	017-04	土師器小皿	B7	包含層	8.0	1.3	外：オサエ 内：ナデ	やや密 ～1.5mmの砂粒含む	並	7.5YR7/6 橙	1/3	
110	017-05	土師器小皿	B7	包含層	7.4	1.4	外：オサエ 内：ナデ	やや密 ～1mmの砂粒含む	並	7.5YR7/6 橙	1/3	
111	019-01	青白磁壺形合子	A地区	表土	3.0	3.7	外：施釉（ロクロ使用）、ヘラ描き 内：施釉（ロクロ使用）底部外面：ロクロケズリ	密 微砂粒含む	良	素地：10Y8/1 灰白 釉色：5Y7/2 灰白 7.5GY7/1 明緑灰	ほぼ完存	
112	019-03	青磁皿	A地区	表土	9.6	2.4	外・内：施釉（ロクロ使用） 底部外面：ケズリ	密 微砂粒含む	良	素地：N8/0 灰白 釉色：5GY6/1 オリーブ灰	1/2	龍泉窯系
113	019-02	白磁皿	B8	包含層	10.8	2.6	外・内：施釉（ロクロ使用） 底部外面：ロクロケズリ	密 微砂粒含む	良	素地：7.5Y7/1 灰白 釉色：2.5GY7/1 明オリーブ灰	1/3	
114	021-02	円筒埴輪	B3	攪乱			外：表面摩滅のため調整不明 内：表面摩滅のため調整不明	粗 ～1.5mmの砂多く含む	並	10YR7/4 にぶい黄橙	体部片	

第4表 出土遺物観察表3

V 結 語

今回の調査では、弥生時代前期の円形周溝墓1基・方形周溝墓3基・土坑2基、古墳時代後期の古墳1基などが確認された。

ここでは、今回の調査成果のまとめと若干の検討を行う。

(1) 円形周溝墓SX3について

SX3は、径約8mの弥生時代前期新段階の円形周溝墓と考えられる。前期の円形周溝墓の発掘例はあまりなく、県内では、初めての調査例となる。

県外においては、岡山県岡山市の百間川沢田遺跡(計2基)^①、香川県善通寺市の龍川五条遺跡(計2基)^②、香川県綾歌郡綾歌町の佐古川・窪田遺跡(計7基)^③などでも確認されている。第11図は、上記の円形周溝墓を類例としてあげたものである。

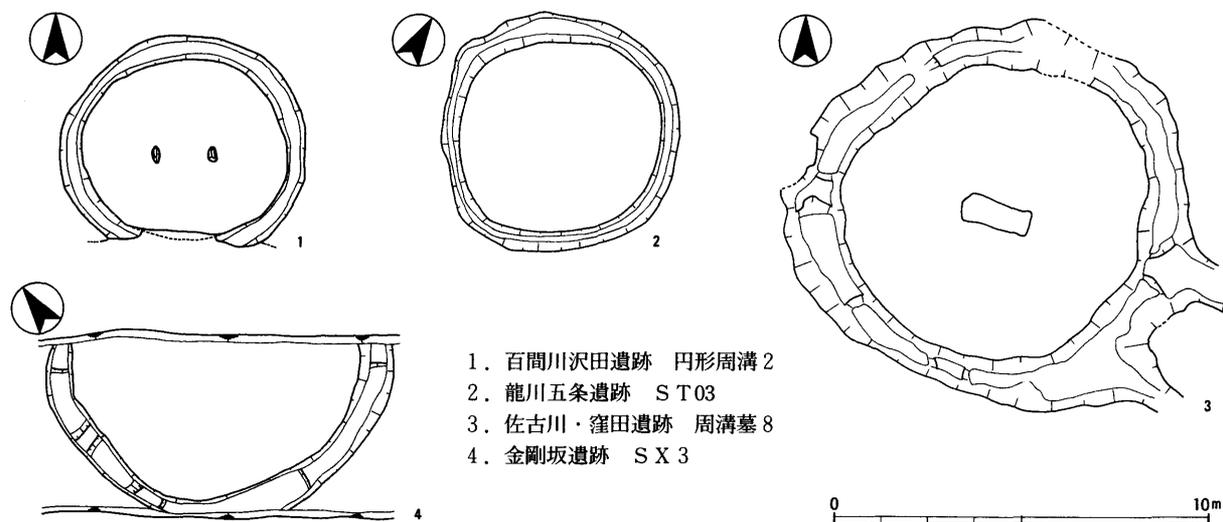
SX3と上記の3遺跡の円形周溝墓の規模を比較してみると、百間川沢田遺跡の円形周溝2や龍川五条遺跡のST03よりも大きく、佐古川・窪田遺跡の周溝墓8に近いことがわかる。また、佐古川・窪田遺跡で確認されている他の円形周溝墓の規模も径約5m～7mのものである。このように現在確認されている前期の円形周溝墓は、径約5m～9mと同時期の最も多く検出されている方形周溝墓^④と規模が同じであることが窺われる。

円形周溝墓の時期については、百間川沢田遺跡の円形周溝2が弥生時代前期中葉に当たり、他は弥生時代前期後半のものである。このように弥生時代前期後半のものが大半を占める。

このことからSX3は、前期の円形周溝墓が多く確認されている時期の、規模が大きい方の例といえることができる。

次に、円形周溝墓の分布については、寺沢薫氏^⑤・近澤豊明氏^⑥・岸本道昭氏^⑦・乗松真也氏^⑧などが論じている。

寺沢氏は、円形周溝墓を含めた円形の墳丘をもつ墓を「円丘墓」と称している。円丘墓の出現が北部九州と中・東部瀬戸内(吉備・播磨)の前期(後半か?)に遡ることや、中期後半には分布が東進し、山間部の但馬や近畿の瀬戸内海東縁地域、さらには東海地方にも検出例が及ぶこと、庄内式併行期には関東地方以西の広い範囲で点的にであるが分布が広く拡散する傾向にあることを述べている。また、近澤氏は、弥生前期から中期前葉までに吉備地方にまず登場し、中期後葉に播磨に伝播し、その波は後期には摂津に達し、末期にはさらにその縁辺部に伝わったと解釈している。岸本氏は備讃瀬戸地域に祖形がみられ、播磨地域で発展して周辺地域に拡大してゆ



1. 百間川沢田遺跡 円形周溝2
2. 龍川五条遺跡 ST03
3. 佐古川・窪田遺跡 周溝墓8
4. 金剛坂遺跡 SX3

第11図 円形周溝墓類例 (1:200)

くと分析している。乗松氏は、初期の周溝墓の平面形態には地域差があることを指摘し、前期の円形周溝墓が確認されていることを、瀬戸内中部地域の特徴とあげている。

このように前期の円形周溝墓は、瀬戸内中部地域から近畿地方に伝わっていったと考えられ、西日本で見られる墓制であるということが出来る。

SX3は、後述するA4形方形周溝墓と考えられる方形周溝墓とともに見つかっている。

このように、当遺跡において西日本に発生地をもつ円形周溝墓と、東日本に発生地をもつ方形周溝墓が存在することになる。このことは、当時の他地域との交流関係を表すものとしてたいへん興味深いものである。

以上のように、当地域の弥生時代前期の墓制について考察する上での貴重な資料を得ることができた。

(2) 方形周溝墓SX6・7について

今回の調査では、弥生時代前期新段階と考えられる方形周溝墓の周溝の一部を検出した。

前期の方形周溝墓は、兵庫県尼崎市東武庫遺跡^⑨や愛知県一宮市山中遺跡^⑩などで確認されている。

県内の検出例としては、津市松ノ木遺跡(SX11)^⑪・多気郡明和町コドノB遺跡(第1次調査のSX37・第2次調査のSX86)^⑫があげられる。

このように前期の方形周溝墓の確認例は少ない^⑬。県内で確認されている前期の方形周溝墓は、四隅が切れるもので、A4形方形周溝墓に該当すると考えられる^⑭。

SX6・7は、周溝の一部のみしか確認できなかったが、A4形方形周溝墓に相当する可能性が高いと推定される。

この形式の方形周溝墓については、前田清彦氏^⑮・服部信博氏^⑯などが検討している。

前田氏は、A4形方形周溝墓をg類と分類している。I期に東海(伊勢湾沿岸)で出現し、分布の中心は東方にあり、特に東海～関東にかけて分布密度が極めて高いことを指摘している。服部氏は、A4形方形周溝墓の発生地を伊勢湾沿岸地方としている。

また、伝播の経路については、伊勢湾沿岸地方から三河・遠江地方を経て関東地方へ至るルートと、伊勢湾沿岸地方から美濃・飛騨地方を経て北陸地方へ至るルートを推定している。

このようにA4形方形周溝墓は、伊勢湾沿岸地方を中心とした、東日本で見られる墓制であるということが出来る。

当調査区の南方の第2次調査区からは、同時期のSD3が検出されており^⑰、また、当調査区の南西方の第4次調査区の古墳の周濠からも同時期の土器が出土している^⑱。これらの溝や周濠は、方形周溝墓の周溝の可能性も考えられる。このことから周辺にも、未知の周溝墓の存在が推定される。

以上のように当調査区及びその周辺に弥生時代前期の墓域が存在していたと考えられる。

(3) 辰ノ口古墳群について

今回の調査でも方墳と推定される1基の古墳の周溝を確認した。過去の調査でも、10基の痕跡が見つかっている^⑲。また、平成12年の明和町教育委員会の調査でも、周溝のみの検出であるが3基確認され、方墳と考えられている^⑳。

今回の調査では、時期を決定できる遺物は得られなかった。築造時期については、過去の調査例から6世紀初頭以降と推定される。墳丘は後世の開墾などによって削平されたものとみられ、確認できなかった。また、埋葬施設についても検出できなかった。石室の基底部も確認されなかったことから木棺直葬墳と考えられる。

上記の調査結果などから、現在のところ当古墳群は、方墳13基・円墳3基・墳形不明1基などから構成されたと思われる。

当古墳群の墳形については、萩原義彦氏が方墳での統一性を指摘している^㉑。今回の調査でもそのことを裏付けることとなった。

当古墳群周辺の明野原台地上や玉城丘陵上は、南伊勢地方最大の群集墳の密集地として知られている^㉒。その中でも当古墳群は、方墳を中心に構成された特異な構造をもつと言うことができる。

〔註〕

- ① 平井 勝編『百間川沢田遺跡3』（岡山県教育委員会・建設省岡山河川工事事務所、1993年）の118～120頁。
- ② 宮崎哲治編『龍川五条遺跡I』（香川県教育委員会、1996年）の83～86頁。
- ③ a 佐藤竜馬・川井國博・中山尚子「佐古川窪田遺跡」『国道バイパス建設に伴う埋蔵文化財調査概報 平成9年度』（香川県教育委員会・〔財〕香川県埋蔵文化財センター・建設省四国地方建設局、1998年）。
b 乗松真也「佐古川・窪田遺跡」『国道バイパス建設に伴う埋蔵文化財調査概報 平成10年度』（香川県教育委員会・〔財〕香川県埋蔵文化財センター・建設省四国地方建設局、1999年）。
- ④ 中村 弘「近畿地方における方形周溝墓の出現」（『網干善教先生古稀記念 考古学論集上巻』、網干善教先生古稀記念会、1998年）の256頁。
- ⑤ 寺沢 薫「弥生時代の円丘墓」（『古代学研究』123号、古代学研究会、1990年）。
- ⑥ 近澤豊明「円形周溝墓について」（『新庄遺跡』、綾部市教育委員会、1995年）。
- ⑦ 岸本道昭「播磨の周溝墓—円形優位の地域色—」（『小神社の堂遺跡』、龍野市教育委員会、1998年）。
- ⑧ 乗松真也「佐古川・窪田遺跡の周溝墓群について」（註③a）の23頁。
- ⑨ 山田清朝編『東武庫遺跡』（兵庫県教育委員会、1995年）。
- ⑩ 服部信博編『山中遺跡』（財団法人愛知県埋蔵文化財センター、1992年）。
- ⑪ 竹内英昭「Ⅲ．津市安東町松ノ木遺跡」（『松ノ木遺跡・森山東遺跡・太田遺跡発掘調査報告』、三重県埋蔵文化財センター、1993年）。
- ⑫ 西出 孝『コドノA遺跡・コドノB〔第1次〕遺跡発掘調査報告』（三重県埋蔵文化財センター、1998年）。
西出 孝『コドノB〔第2次・第3次〕遺跡発掘調査報告』（三重県埋蔵文化財センター、2000年）。
- ⑬ 県内の中期前葉の例としては、鈴鹿市上箕田遺跡の方形周溝1〔文献a〕・津市安東町松ノ木遺跡のS X10〔文献b〕・一志郡

一志町片野遺跡〔文献c〕のS X100・一志郡嬉野町下之庄東方遺跡の6号墓など〔文献d〕・多気郡明和町古里遺跡のS D39・40〔文献e〕・多気郡明和町コドノB遺跡のS X38〔文献f〕などがあげられる。

〔文献a〕新田剛『上箕田遺跡』（鈴鹿市教育委員会、鈴鹿市遺跡調査会、1993年）。

〔文献b〕註⑩に同じ。

〔文献c〕河瀬信幸『片野遺跡発掘調査報告』（三重県教育委員会、1985年）。

〔文献d〕三重県教育委員会『下之庄東方遺跡〔高畑地区〕』（1987年）。

〔文献e〕山澤義貴・谷本鋭次『古里遺跡発掘調査報告』（三重県文化財連盟、1974年）。

〔文献f〕註⑩に同じ。

- ⑭ 石黒立人「伊勢湾周辺地方における方形周溝墓出現期の様相」（『マージナル』No7、愛知県考古学談話会、1987年）。

- ⑮ 前田清彦「方形周溝墓平面形態考」（『古代文化』第43巻第8号、古代学協会、1991年）。

- ⑯ 服部信博「墓制」（註⑩に同じ）。

- ⑰ 浅尾 悟・宮田勝功「Ⅲ．多気郡明和町金剛坂遺跡〔辰ノ口地区〕」（『昭和59年度農業基盤整備事業地域発掘調査報告』、三重県教育委員会、1985年）。

- ⑱ 萩原義彦・川崎志乃『金剛坂遺跡〔第4次〕・辰ノ口古墳群〔第2次〕発掘調査報告』（三重県埋蔵文化財センター、1999年）。

- ⑲ 註⑰・⑱に同じ。

- ⑳ 明和町教育委員会斎宮跡課「金剛坂遺跡辰ノ口地区発掘調査概報」（2000年）。

- ㉑ 萩原義彦「古墳時代〔辰ノ口古墳群〕について」（註⑱）の52頁。

- ㉒ 当古墳群周辺の古墳群については、下記の文献に述べられている。

西村美幸「玉城丘陵と周辺の群集墳」『Mie history』vol. 10（三重県歴史文化研究会、1999年）。

西村美幸「玉城丘陵とその周辺の群集墳について」（『研究紀要』第8号、三重県埋蔵文化財センター、1999年）。



調査前風景 (南東から)



A地区全景 (東から)

図版 2



B地区全景（南東から）



SX1（南東から）

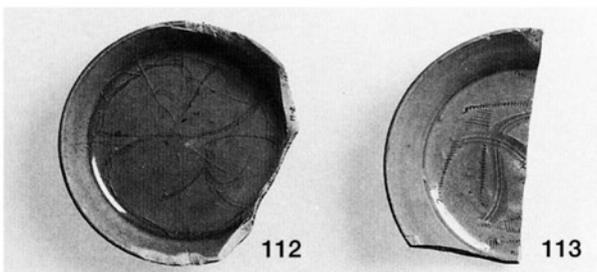
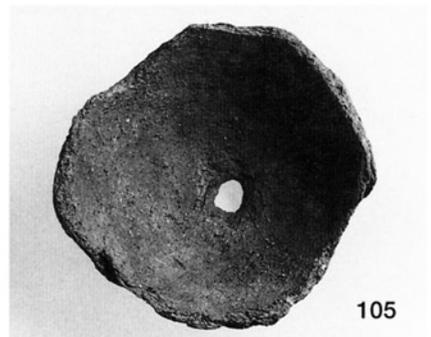
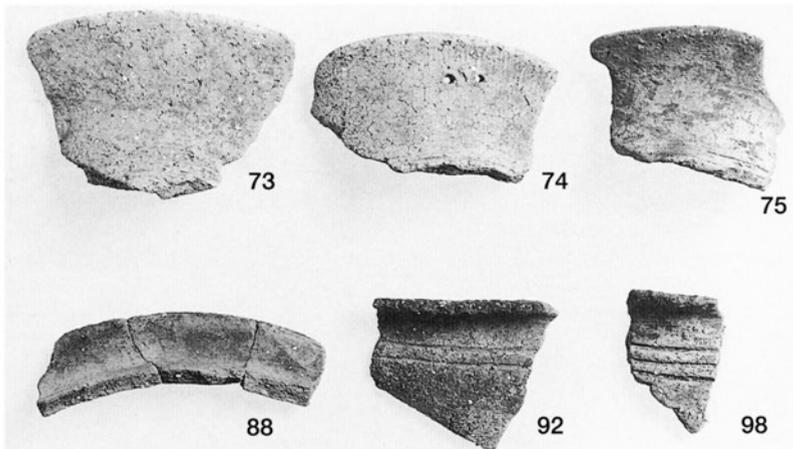
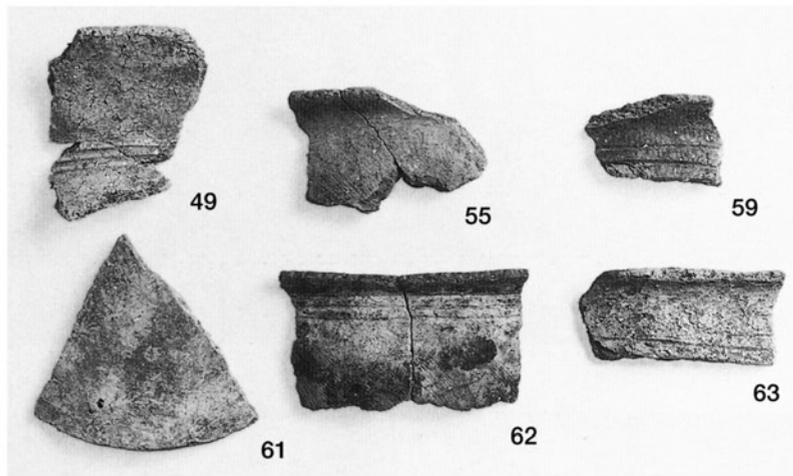
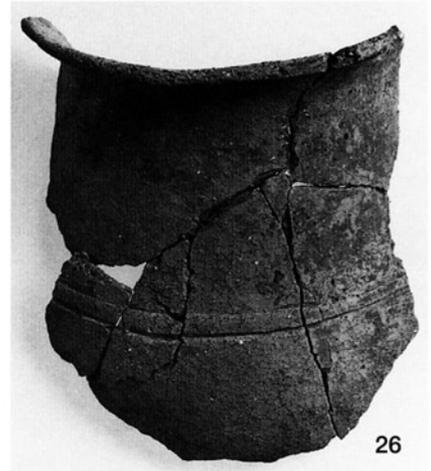
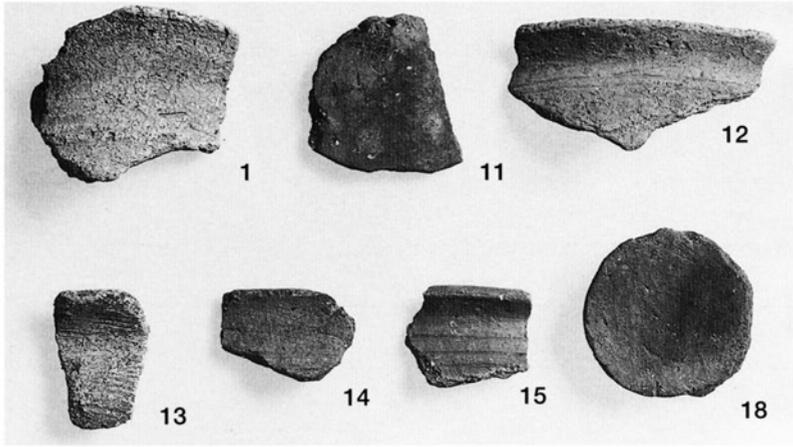


S X 3 (東から)



14号墳 (北西から)

図版 4



出土遺物 (1 : 3)

報告書抄録

ふりがな	こんごうさかいせき (だい5じ)・たつのくちこふんぐん (だい3じ) はつかつちようさほうこく						
書名	金剛坂遺跡 (第5次)・辰ノ口古墳群 (第3次) 発掘調査報告						
副書名							
巻次							
シリーズ名	三重県埋蔵文化財調査報告						
シリーズ番号	225						
編著者名	奥野 実						
編集機関	三重県埋蔵文化財センター						
所在地	〒515-0325 三重県多気郡明和町竹川503 TEL 0596-52-1732						
発行年月日	西暦2001年3月30日						
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード	北緯 。、"	東経 。、"	調査期間	調査面積	調査原因
こんごうさかいせき 金剛坂遺跡 たつのくちこふんぐん 辰ノ口古墳群	みえけんたきぐん 三重県多気郡 めいわちようこんごうさか 明和町金剛坂 あざたつのくち 字辰ノ口・ ふるかいと 古垣内	市町村	34° 31' 45"	136° 36' 26"	19991108 ~19991228	350m ²	平成11年度一般 地方道多気停車場 斎明線緊急地 方道路整備工事
		24442					
		遺跡番号 36					
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項		
金剛坂遺跡	集落跡	弥生前期	円形周溝墓 方形周溝墓 溝・土坑	弥生土器	弥生時代前期の円形周溝 墓と方形周溝墓を検出		
辰ノ口古墳群	古墳	古墳後期	古墳	土師器・須恵器	古墳1基		

平成 13(2001) 年 3 月に刊行されたものをもとに
平成 19(2007) 年 11 月にデジタル化しました。

三重県埋蔵文化財調査報告 2 2 5

金剛坂遺跡(第 5 次)・辰ノ口古墳群(第 3 次)発掘調査報告

2 0 0 1 年 3 月

編集 三重県埋蔵文化財センター
発行
印刷 文化印刷有限公司
